

「若年層の観光活動の減少要因に関する研究」
に対するコメント および
「国内宿泊観光の宿泊数に関する実態把握と
施策ターゲットの抽出」

2010年7月28日(水) 18:00 ~
第101回 運輸政策コロキウム
於: (財)運輸政策研究機構 会議室

日比野 直彦

政策研究大学院大学
大学院 政策研究科 准教授

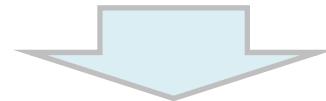


奥山研究員の発表への総括

- 「**若年層の観光離れ**」に焦点をあて、**観光統計データ等**を基に、定量的に考察している点は、たいへん興味深い！
- 時系列分析により、いくつかの要因が抽出されたことは大きな前進であり、**政策提言**に向けた**今後のさらなる研究に繋がる基礎的な分析**としては評価できる！

奥山研究員の発表へのコメント

- ・ 過去1年間において「観光」を行わなかった理由の「経済的」「時間的」に着目しているが…
- ・ この回答をどのように捉えるべきか？



- ・ お金が十分にあって、時間が余っていたら、今の「20歳代」は、本当に「観光旅行」を行うのか？

- ・若年層の嗜好、活動の変化と観光行動の関係を理解することが重要！

昔

アルバイト

自動車の購入

友人との行動

観光旅行

特に、「旅行」をしたくない人でも
「友人との遊び」との一部として
「観光旅行」を実施

今

家計簿男子

お弁当男子

草食系男子

個人行動の増加

自分の好きなことになら、お金
も時間も使うが、他人とともに
行動することに価値を感じない

- ・単に、旅行費用、休暇の問題ではなく、
**根本的な価値観を見直す必要があるので
はないか？**

第101回 運輸政策コロキウム

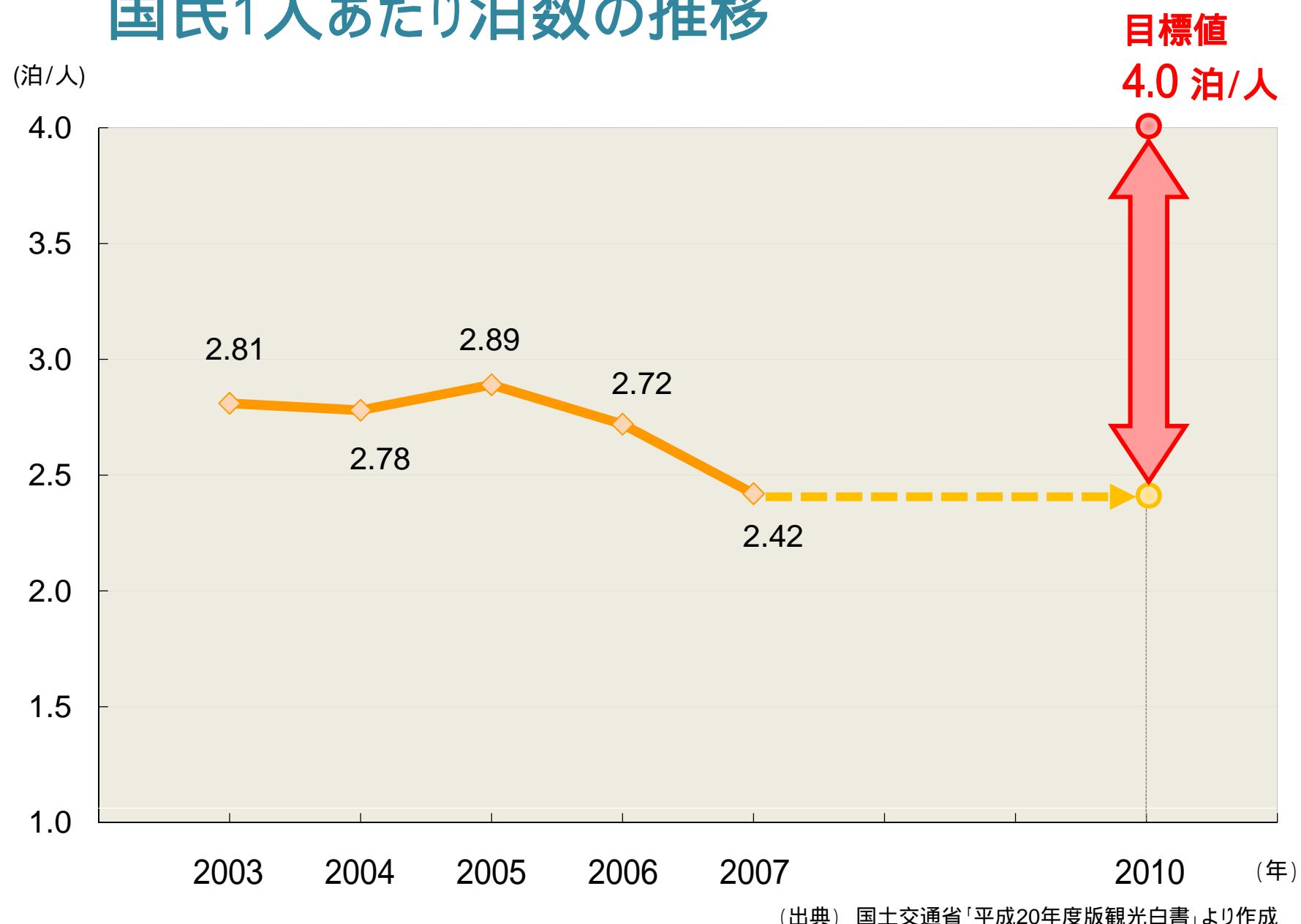
国内宿泊観光の宿泊数に関する 実態把握と施策ターゲットの抽出

なぜ「宿泊数」に着目する必要があるのか？

	観光立国推進基本計画における5つの目標	目標値
1	訪日外国人旅行者数を2010年までに 1,000万人 にすることを目標とし、将来的には、3,000万人を目指す。 (1,500万人(2013) 2,000万人(2016) 2,500万人(2019))	733 万人(2006) 1,000 万人(2010)
2	日本人の海外旅行者数を2010年までに 2,000万人 にすることを目標とし、国際相互交流を拡大させる。	1,735 万人(2006) 2,000 万人(2010)
3	旅行を促す環境整備や観光産業の生産性向上による多様なサービスの提供を通じた新たな需要の創出等を通じ、国内における観光旅行消費額を2010年度までに 30兆円 にすることを目標とする。	24.4 兆円(2005) 30 兆円(2010)
4	日本人の国内観光旅行による1人当たりの宿泊数を2010年度までにもう1泊増やし、年間 4泊 にすることを目標とする。	2.77 泊(2006) 4 泊(2010)
5	我が国における国際会議の開催件数を2011年までに 5割以上 増やすことを目標とし、アジアにおける最大の開催国を目指す。	168 件(2006) 252 件(2010)

(出典) 観光庁資料より作成

国民1人あたり泊数の推移



問題意識(1)

国内宿泊観光行動の
実態把握が十分に行なわれずに
宿泊数に関する目標値が
設定されているのではないか？

問題意識(2)

観光統計データが活用されていない！

多くの情報を含んだ貴重なデータであるにも
関わらず、分析・考察等が不十分なため、
施策に活かしきれていない

本研究の目的

既存の観光統計データを用いて時系列分析を行うことにより

国内宿泊觀光行動の過去のトレンドを

旅行者属性(年齢階層, 活動等)に着目して把握

宿泊数に影響を与えている要因を抽出

今後の觀光施策のターゲットを示す

分析データ

「国民の観光に関する動向調査」

社団法人
 日本観光協会が調査し
「観光の実態と志向」として出版

1964年からほぼ共通の項目で調査

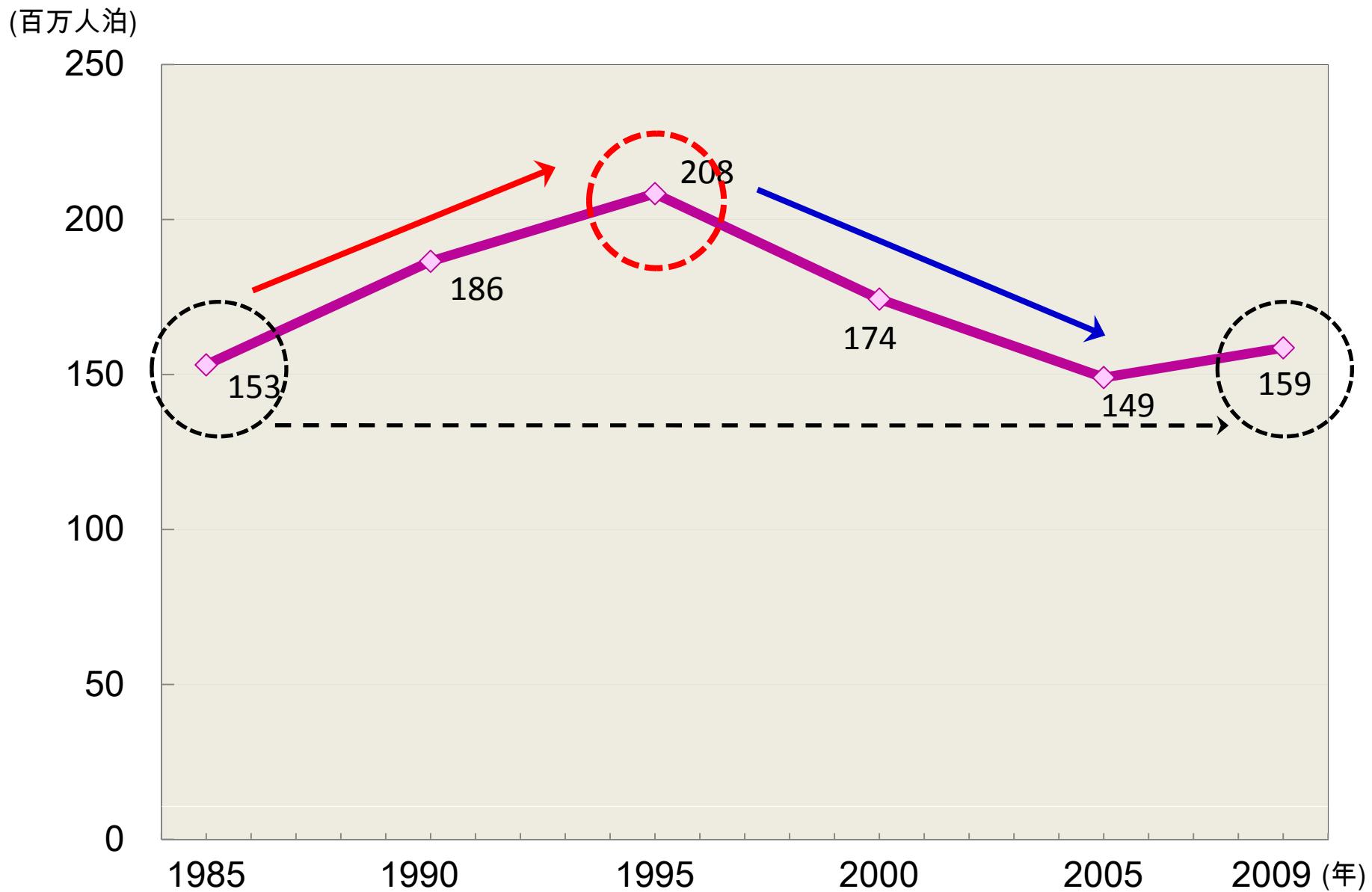
1985年以降の調査における
個票データを使用

分析内容

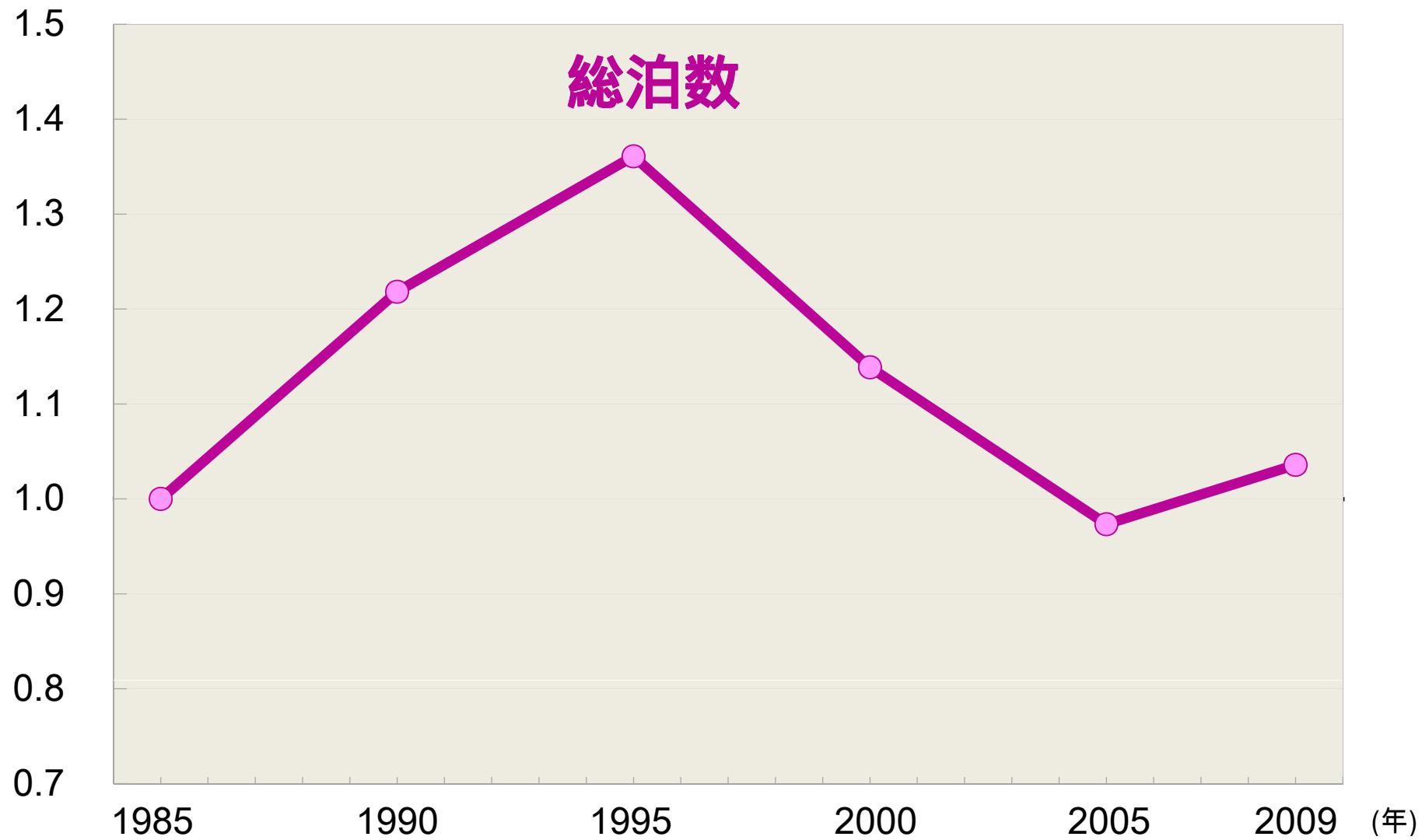
1. 宿泊数に関する分析
2. 地域ブロック間の旅行者数の変動分析
3. 宿泊費に関する分析

1. 宿泊数に関する分析
2. 地域ブロック間の旅行者数の変動分析
3. 宿泊費に関する分析

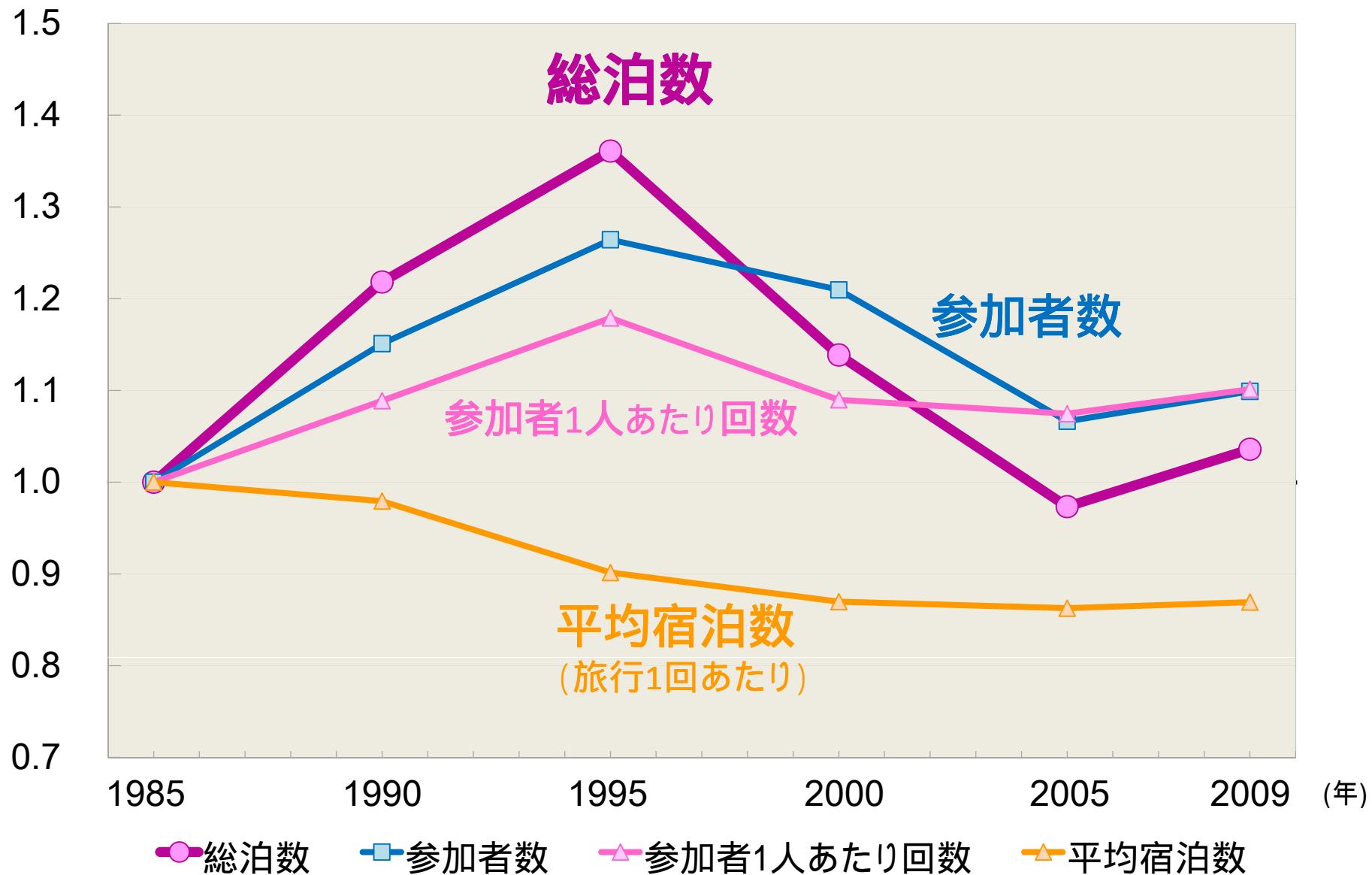
総泊数の推移



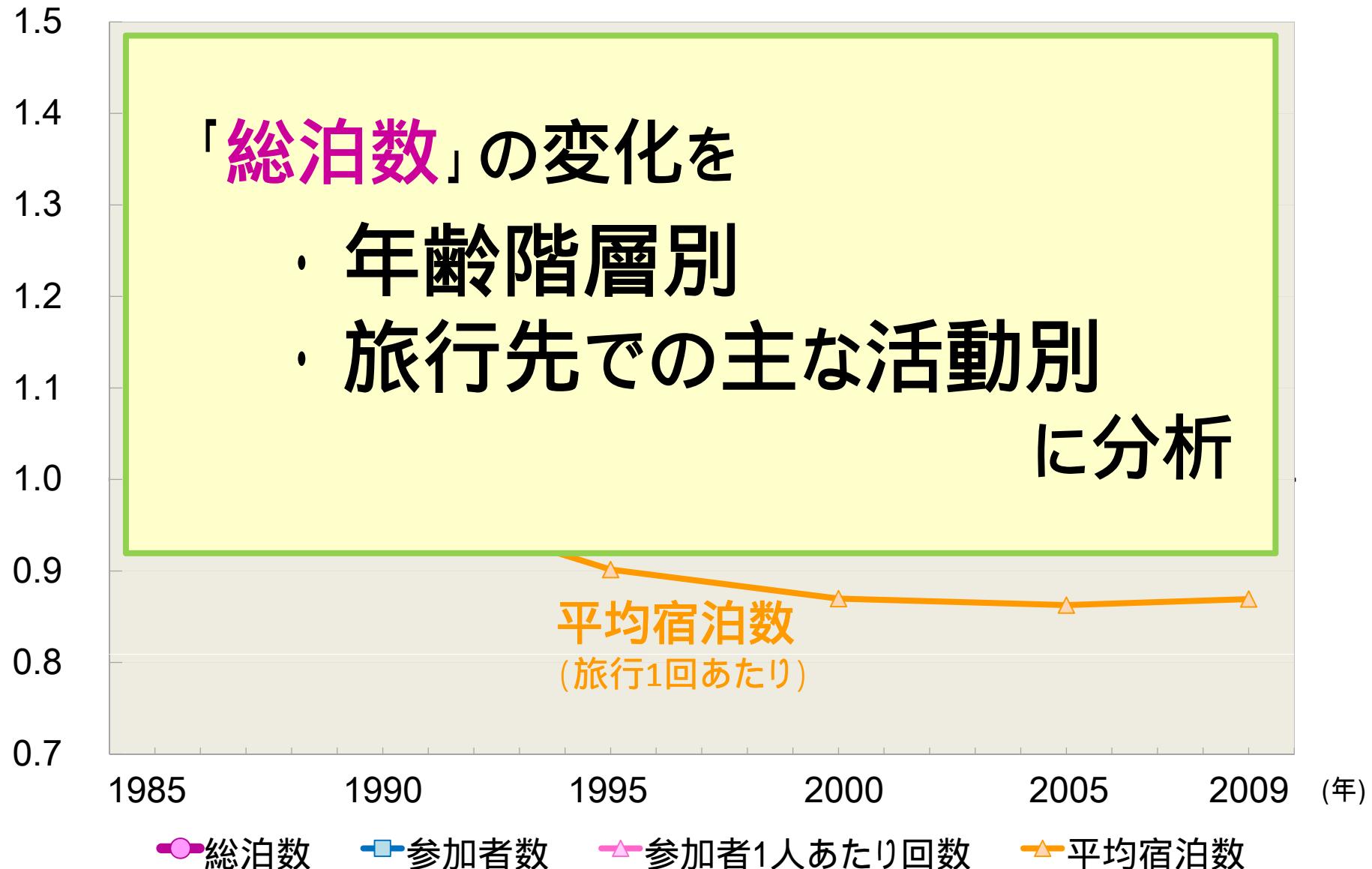
総泊数の推移 (1985年を1.0)



総泊数の推移 (1985年を1.0)

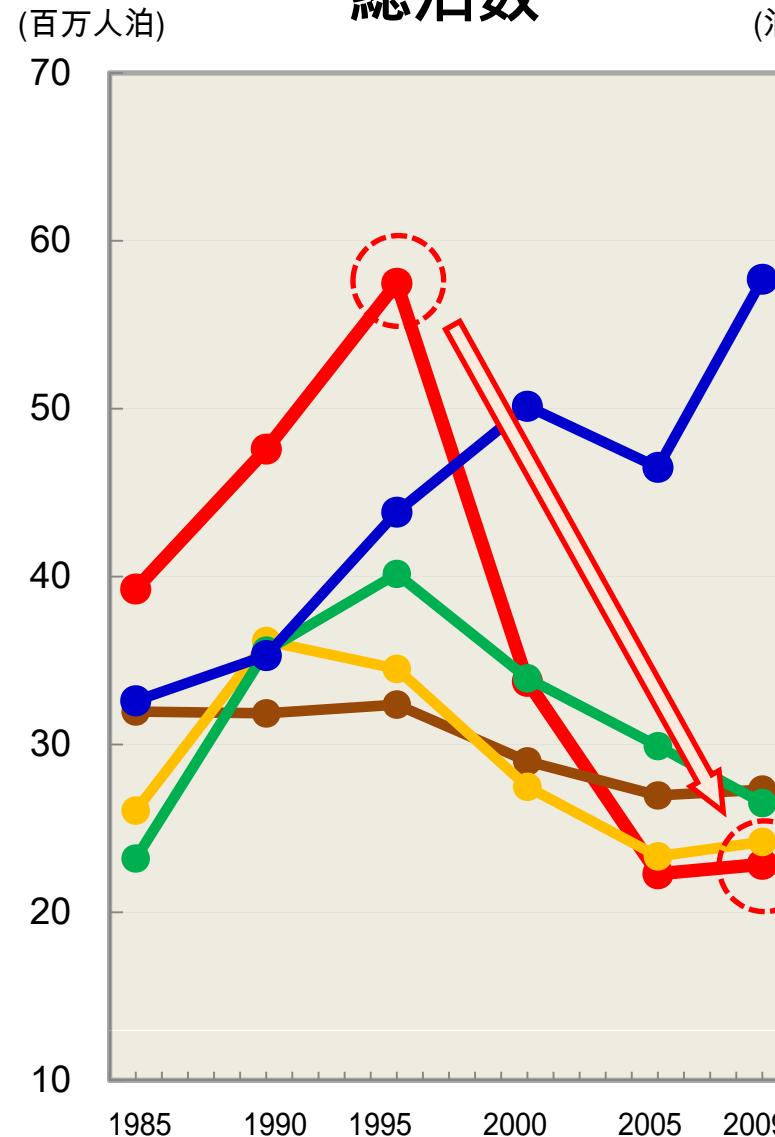


総泊数の推移 (1985年を1.0)

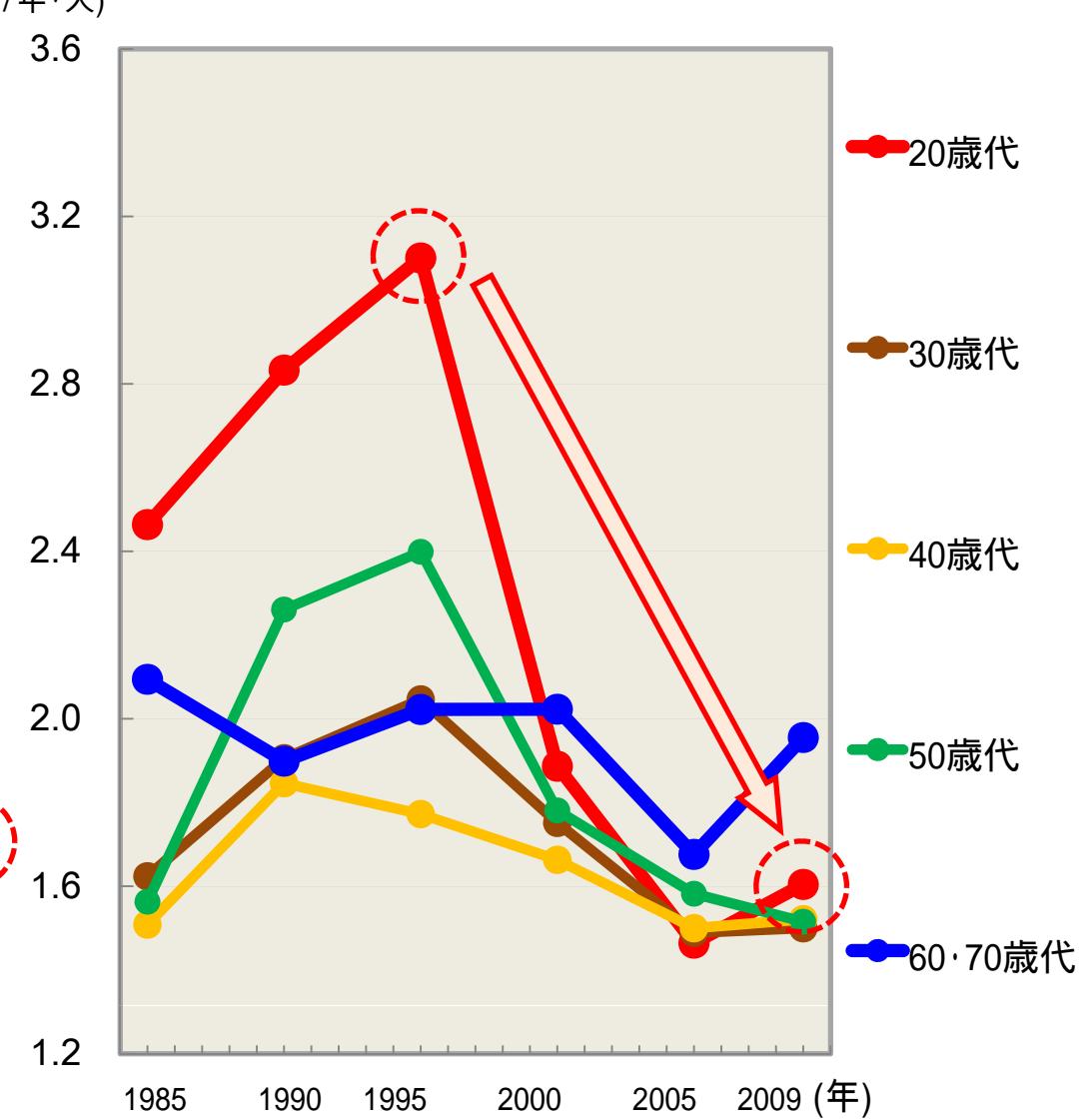


年齢階層別の宿泊数の推移

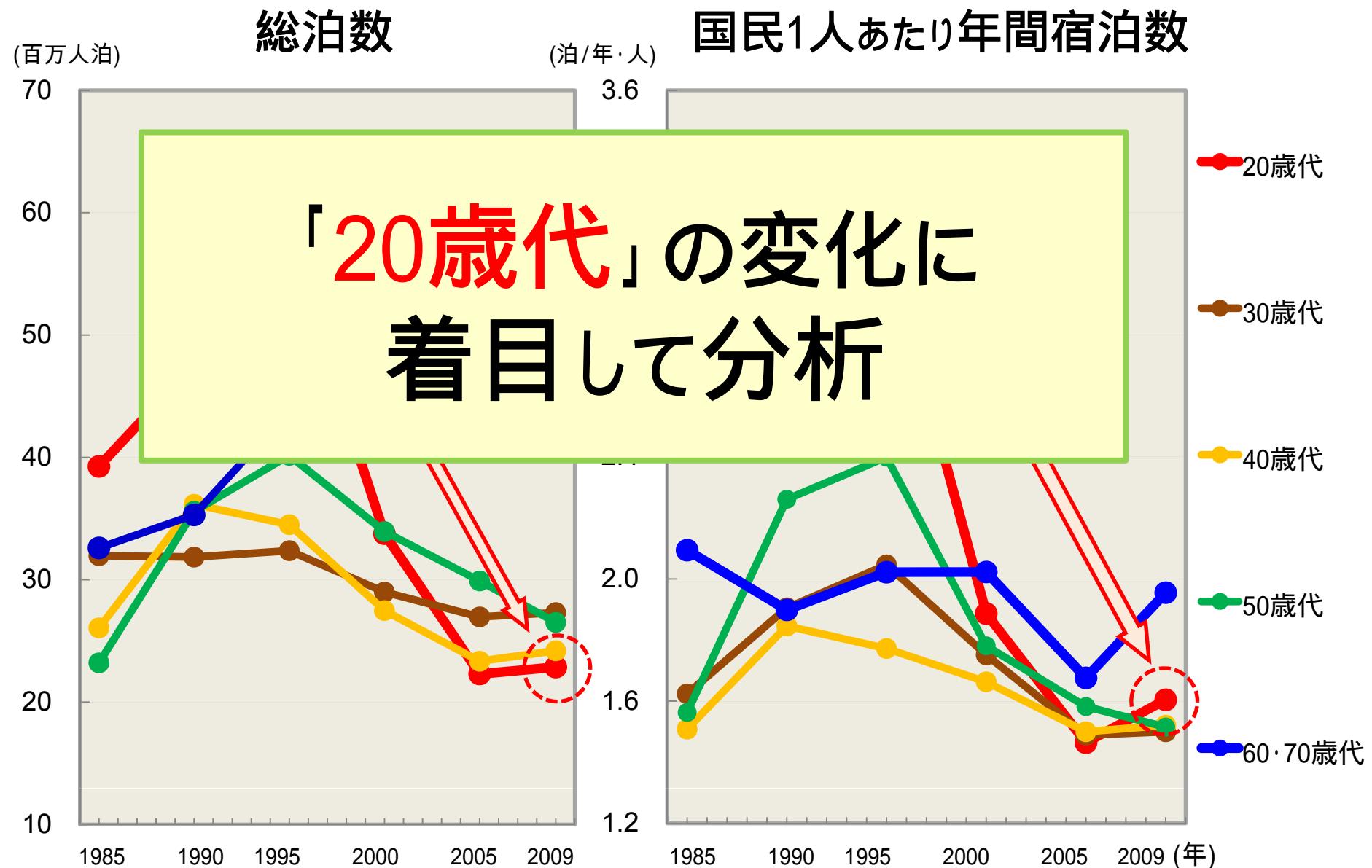
総泊数



国民1人あたり年間宿泊数

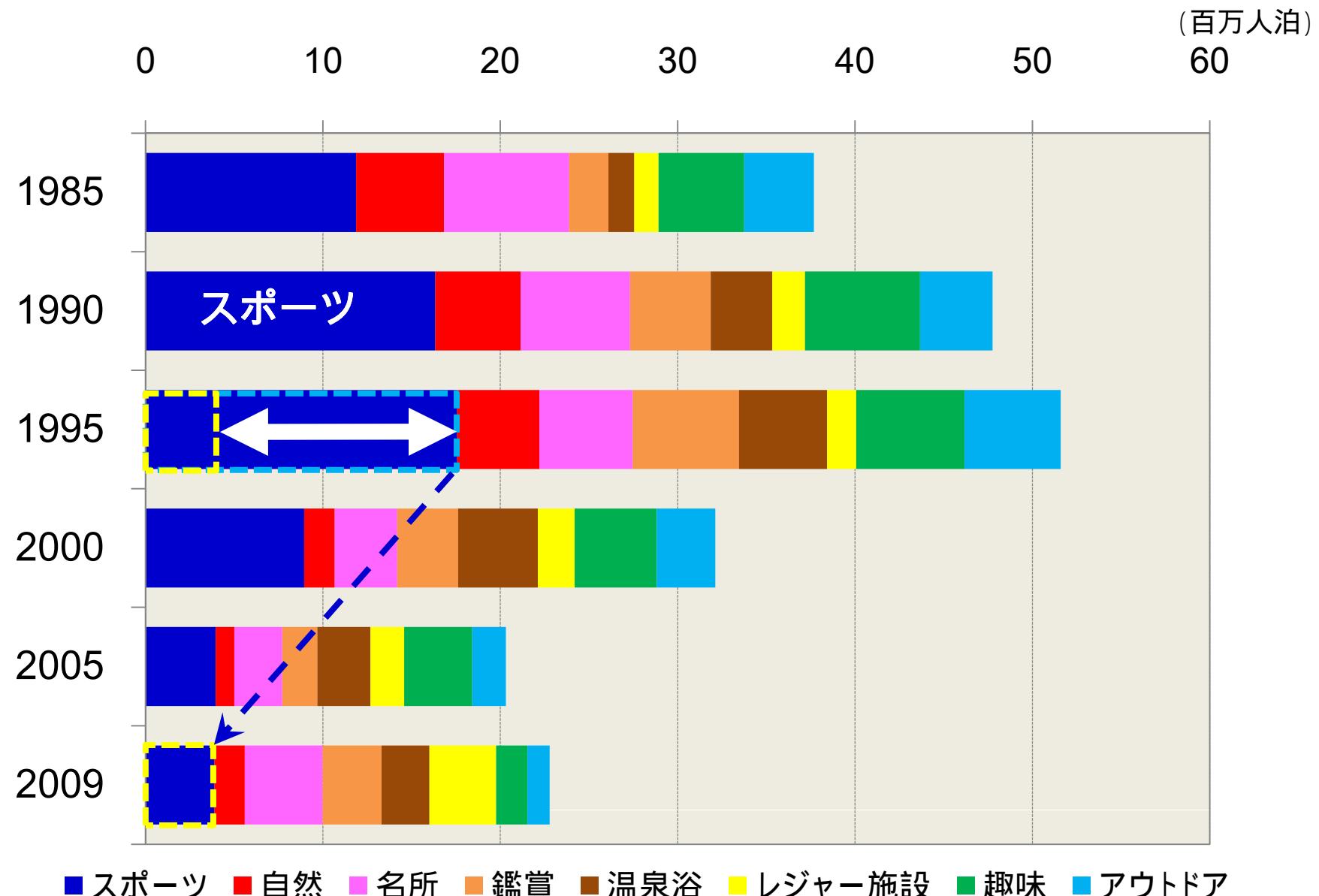


年齢階層別の宿泊数の推移



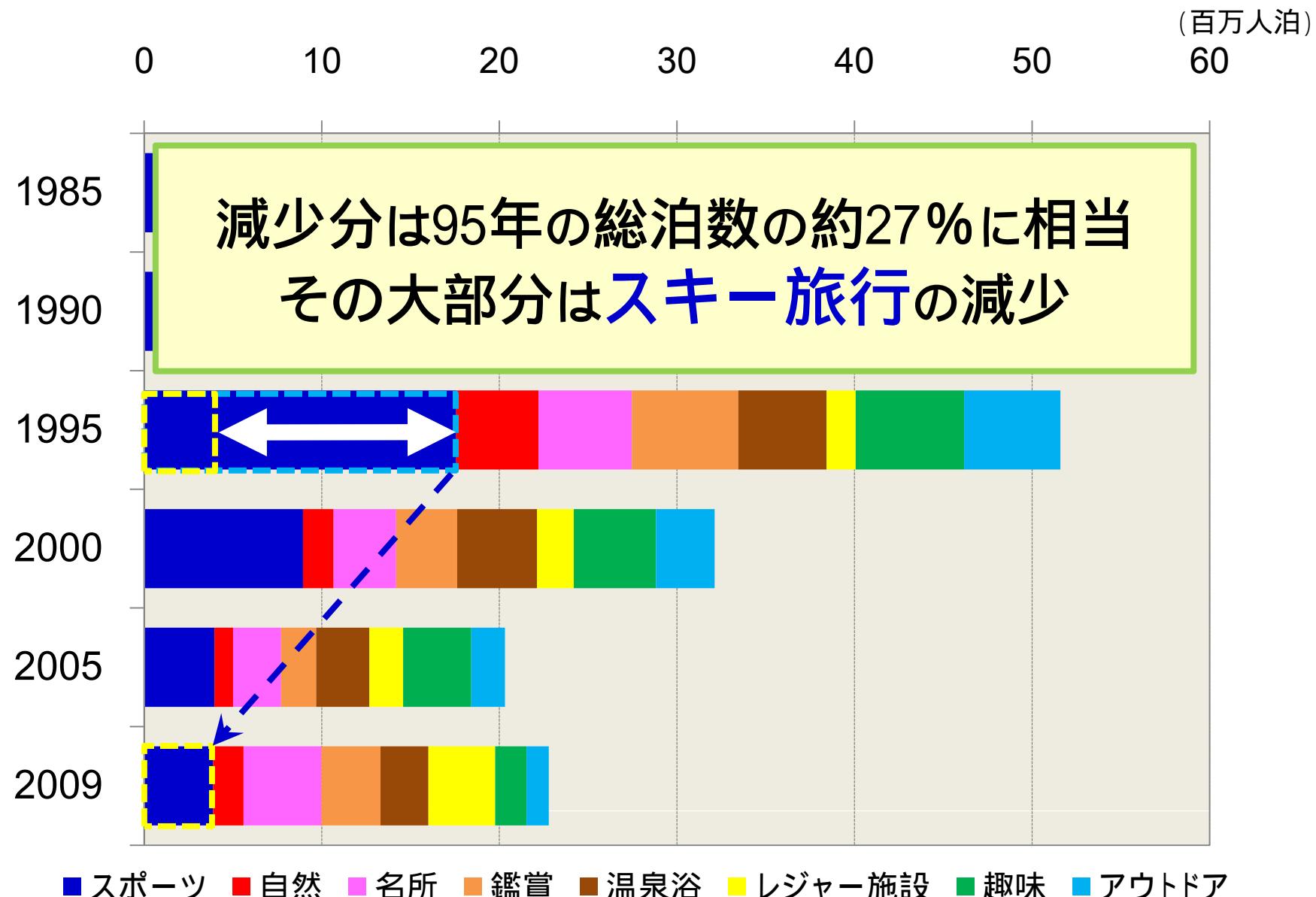
主活動別の総泊数の時系列変化

20歳代



主活動別の総泊数の時系列変化

20歳代

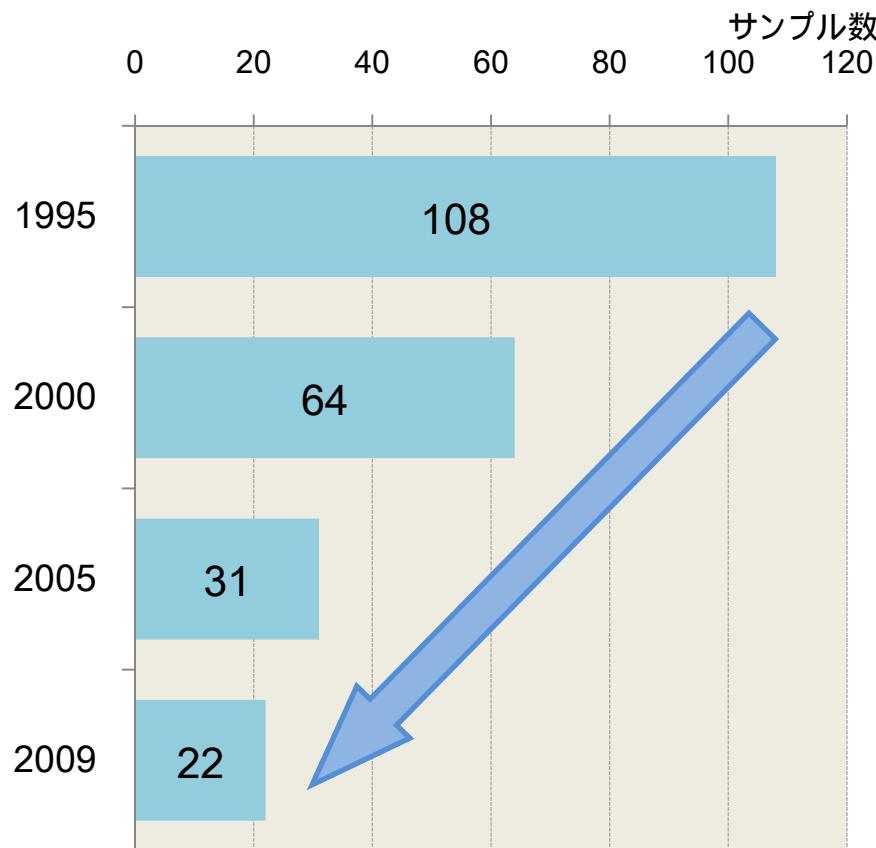


1966-1975年生のスキー旅行の変化

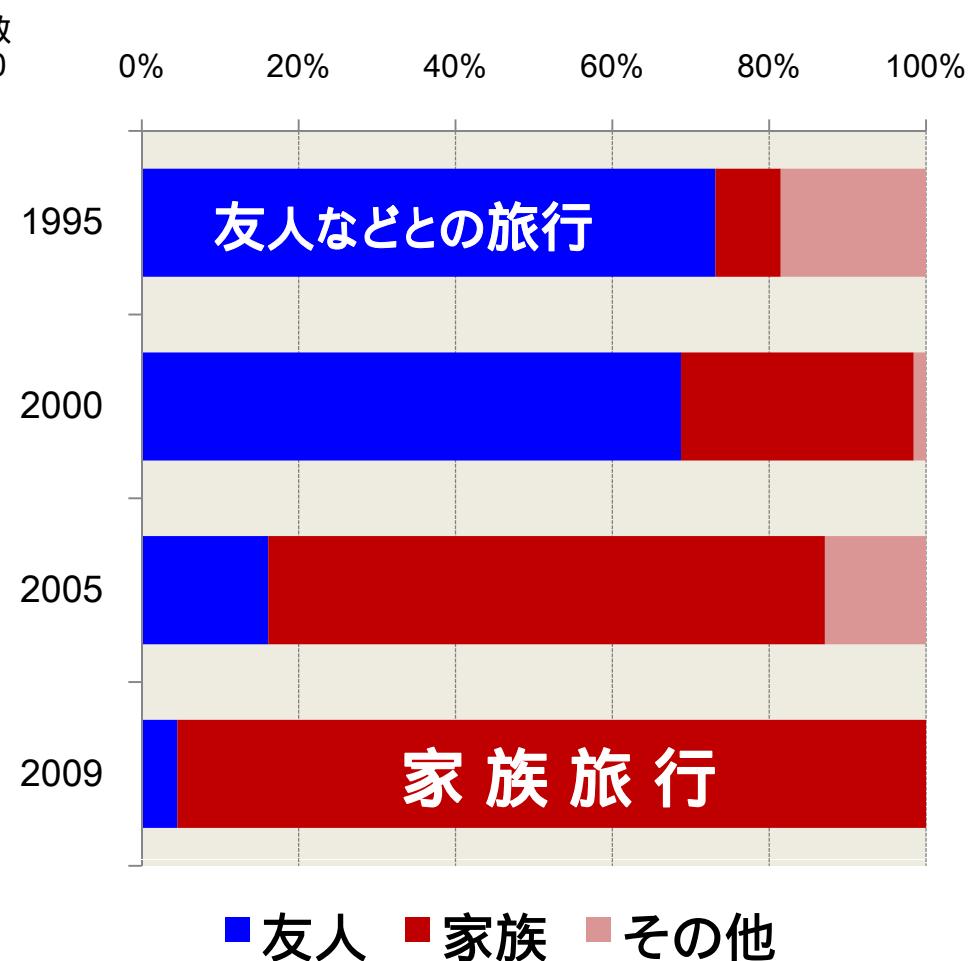
(1995年・20-29歳)

(2009年・34-43歳)

スキー旅行参加者数

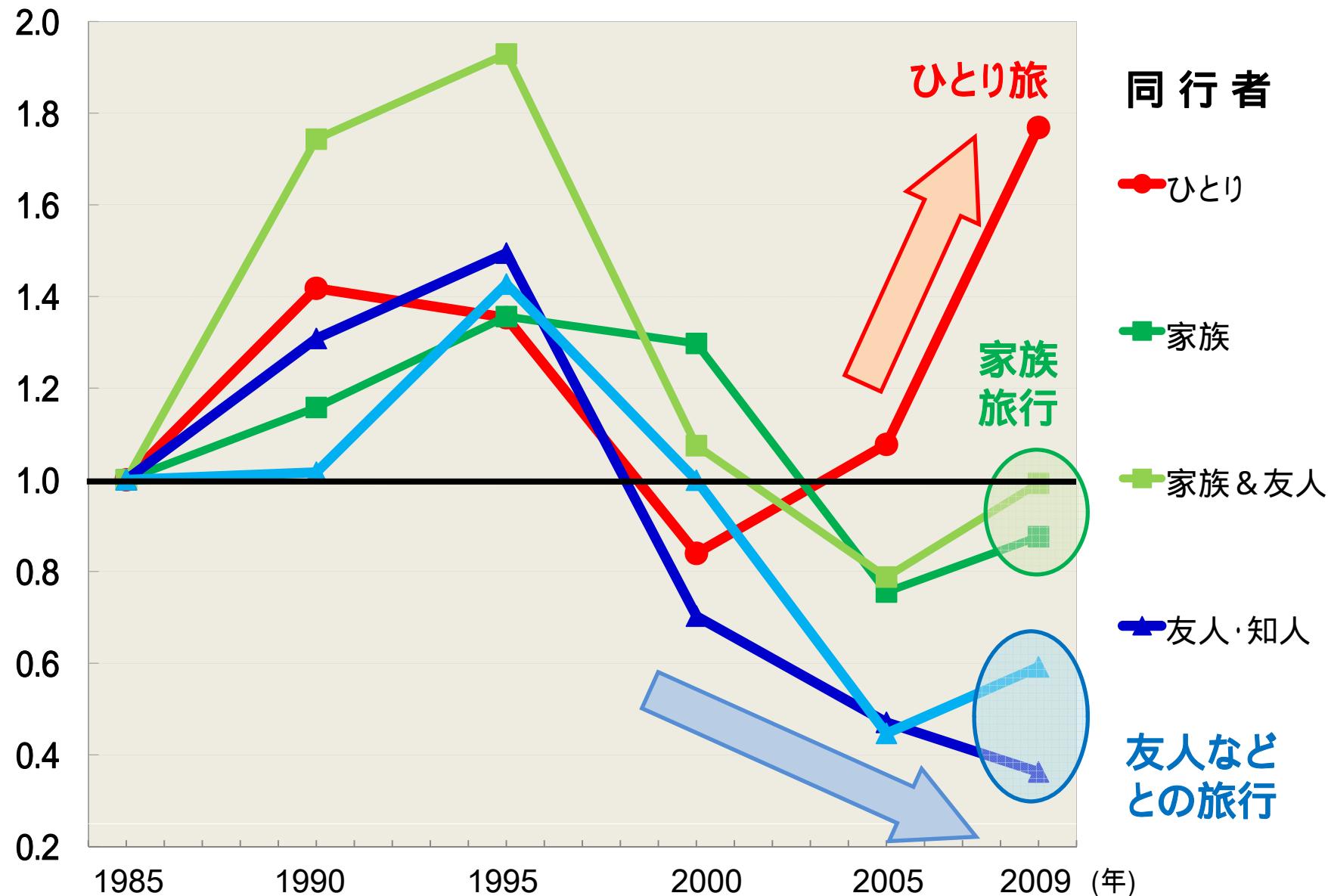


旅行形態の変化



旅行形態別の総泊数の推移 (1985年を1.0)

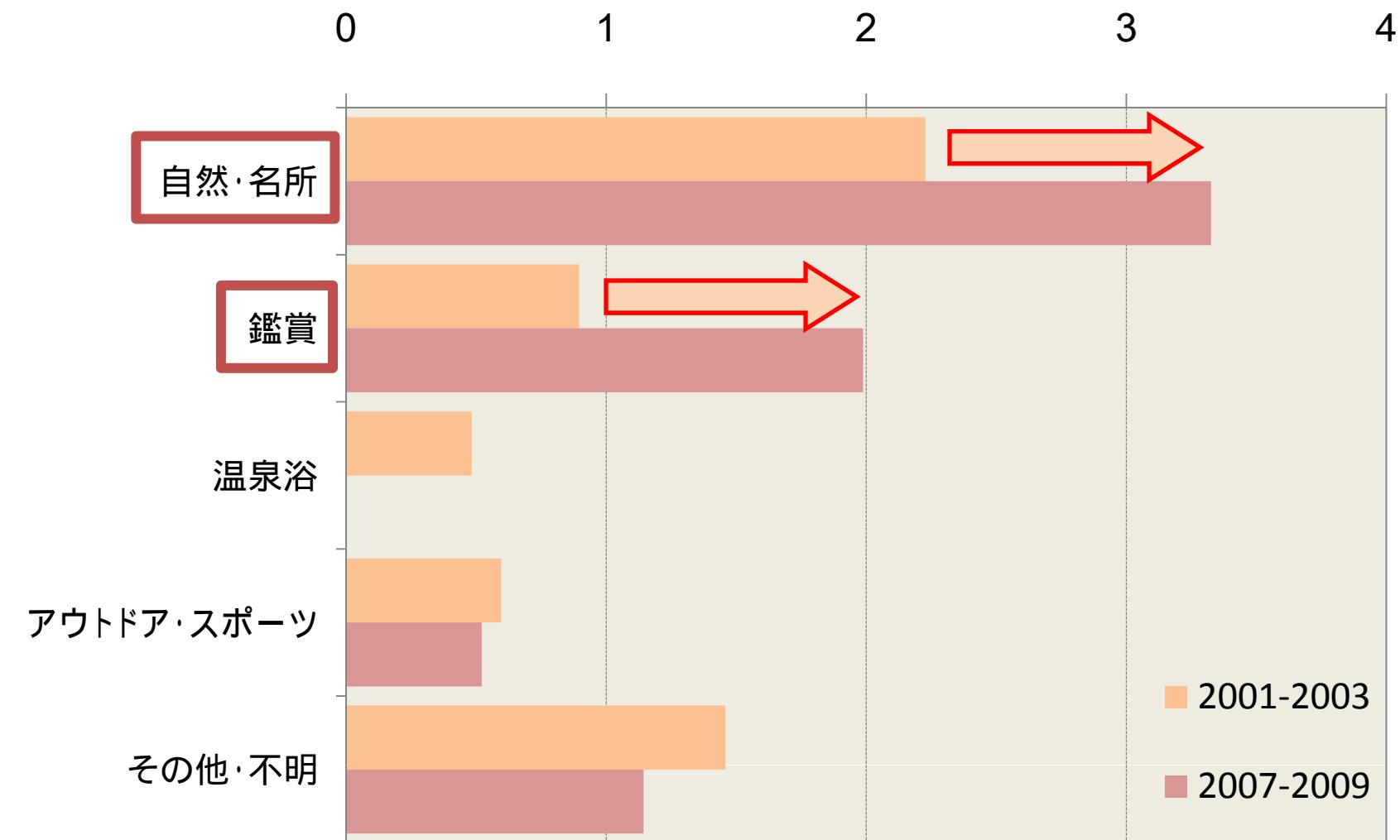
20歳代



20歳代

ひとり旅の総泊数の変化 (旅行先での主な活動別)

(百万人泊)

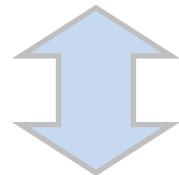


20歳代・宿泊数に関するまとめ

1995年以降 総泊数が激減

しかし、全ての面で一律に減少しているわけではなく

・友人との旅行（特にスポーツ旅行）が激減



・ひとり旅の増加

若者の個人行動化の進行の表れ

1. 宿泊数に関する分析
2. 地域ブロック間の旅行者数の変動分析
3. 宿泊費に関する分析

地域ブロックの区分

北海道

東 北：青森、岩手、宮城、秋田、山形、福島

北関東：茨城、栃木、群馬

首都圏：埼玉、千葉、東京、神奈川

甲信越：新潟、山梨、長野

中 部：富山、石川、福井、岐阜、愛知、静岡

関 西：三重、滋賀、京都、大阪、兵庫、奈良、和歌山

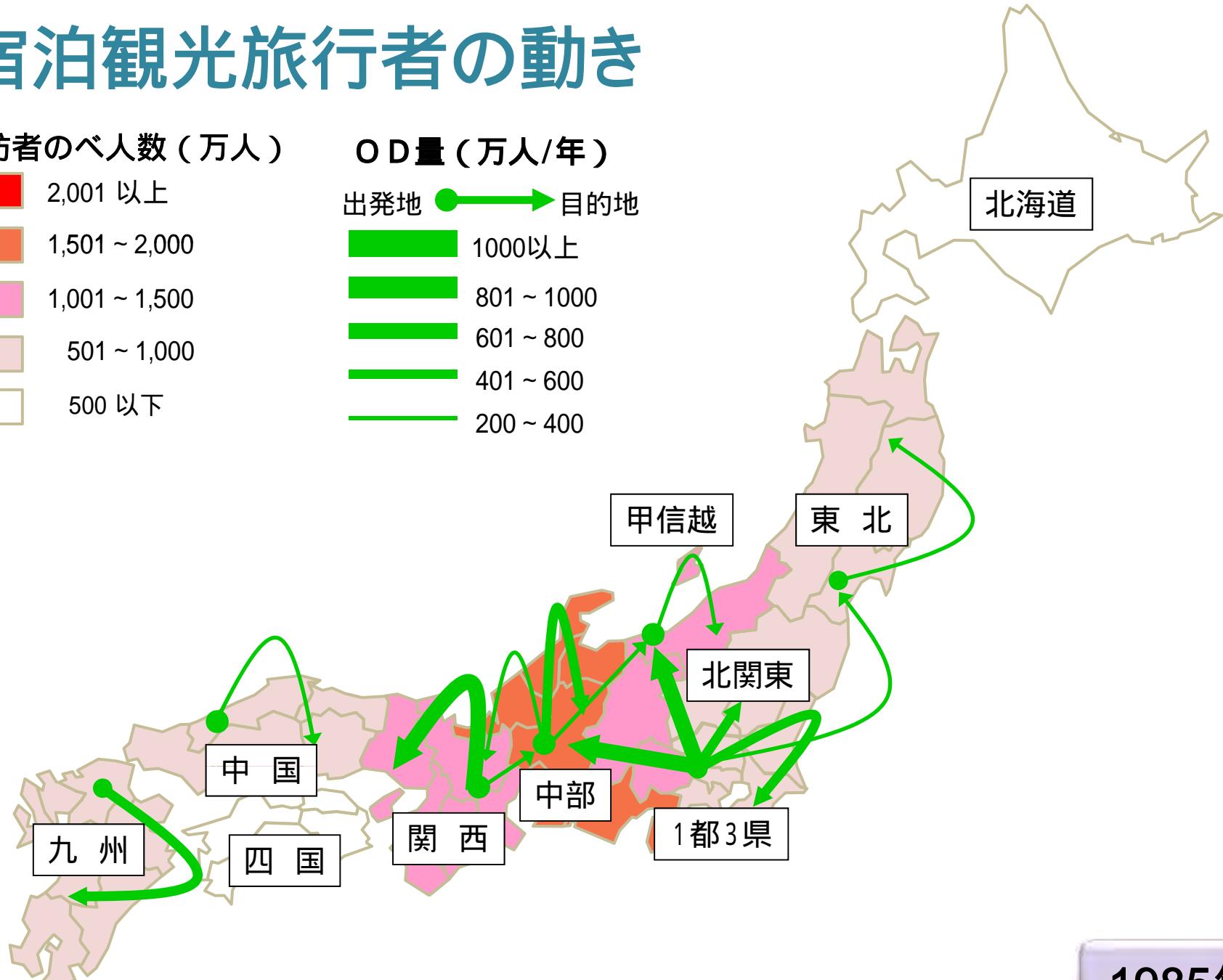
中 国：鳥取、島根、岡山、広島、山口

四 国：徳島、香川、愛媛、高知

九 州：福岡、佐賀、長崎、熊本、大分、宮崎、鹿児島、沖縄



宿泊観光旅行者の動き



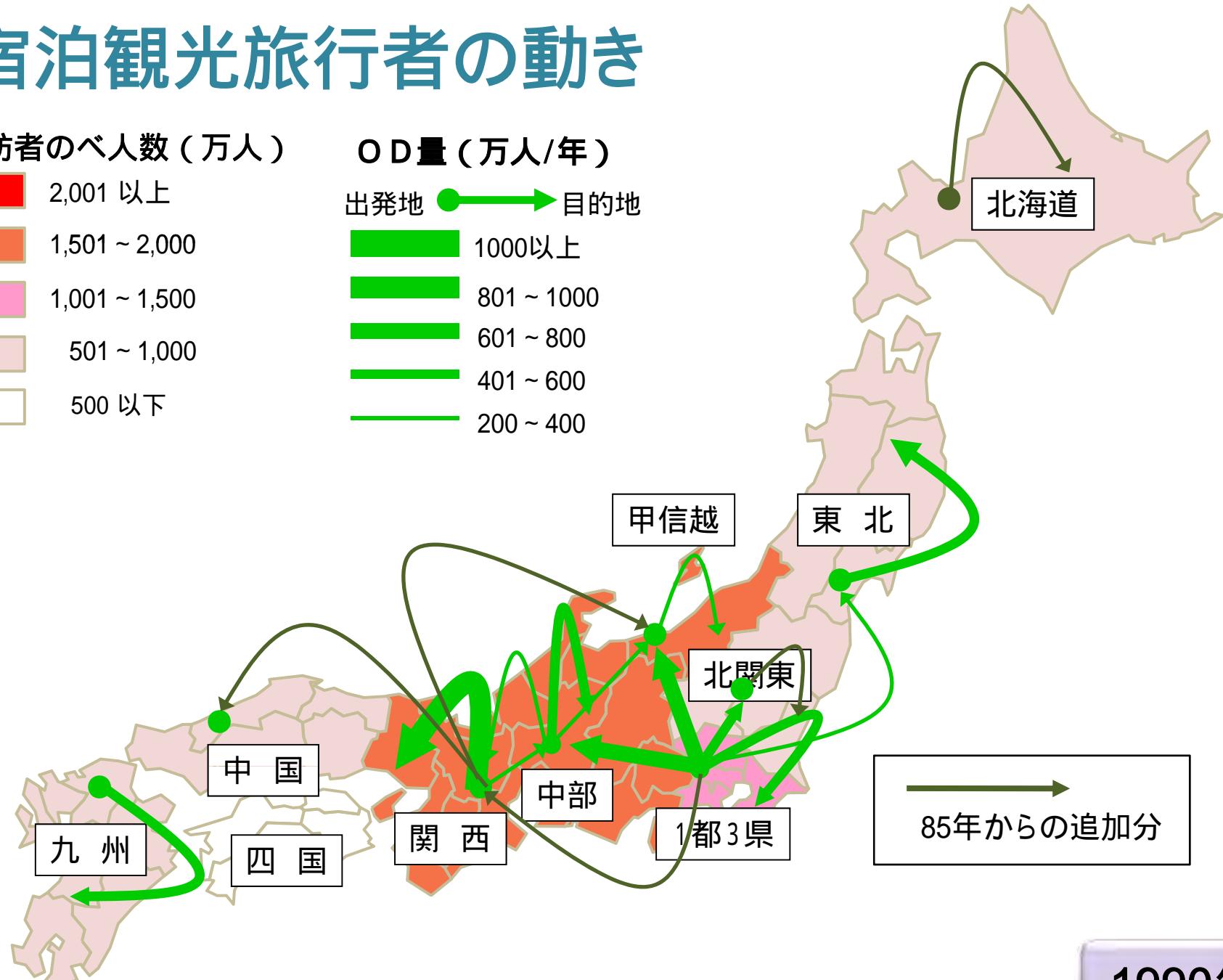
1985年

宿泊観光旅行者の動き

来訪者のべ人数（万人）



OD量（万人/年）

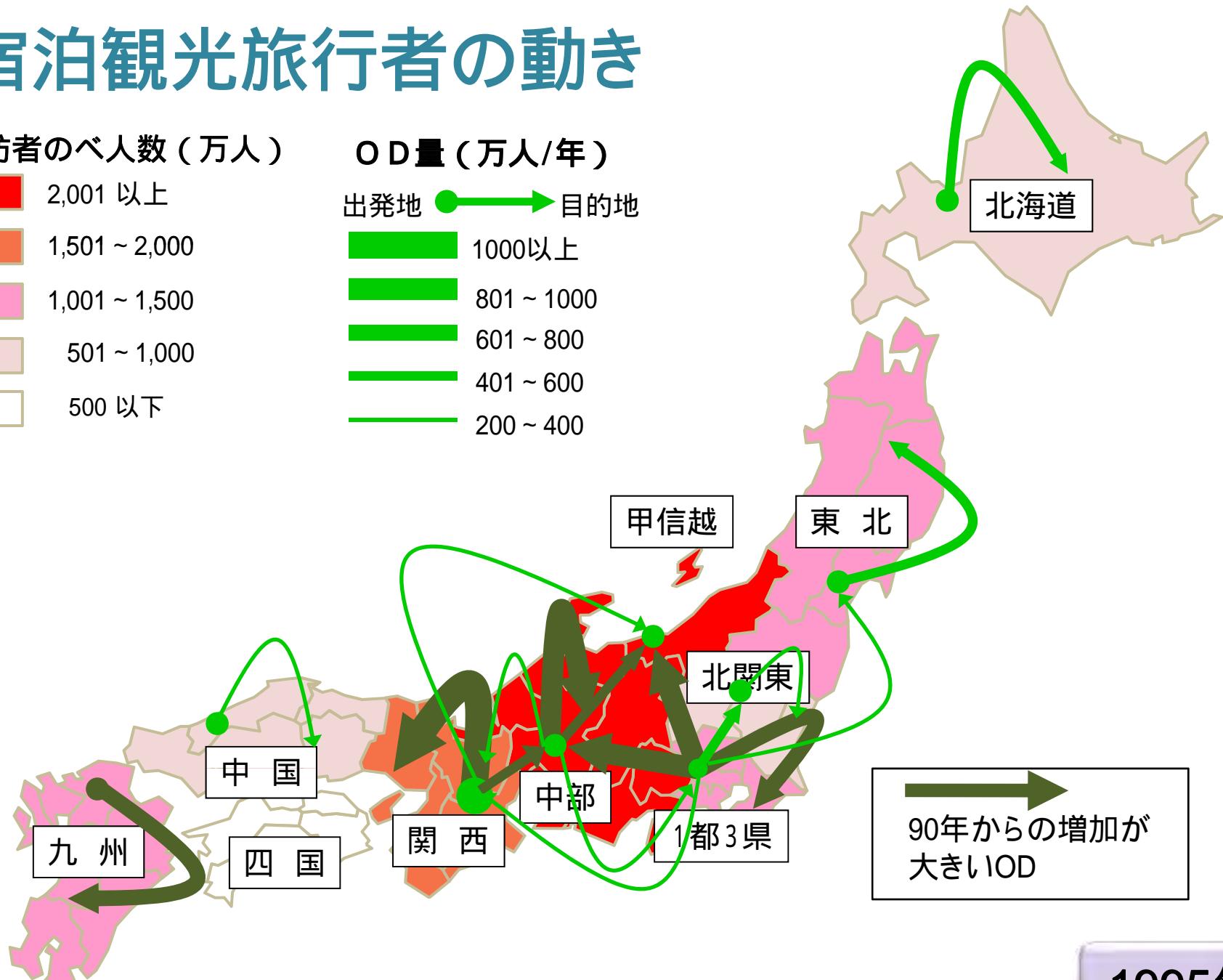


宿泊観光旅行者の動き

来訪者のべ人数（万人）

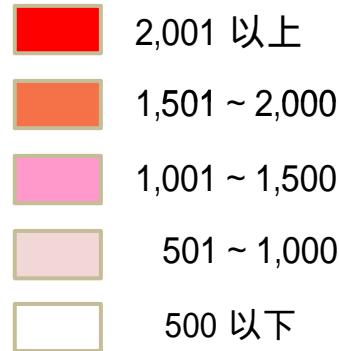


OD量（万人/年）

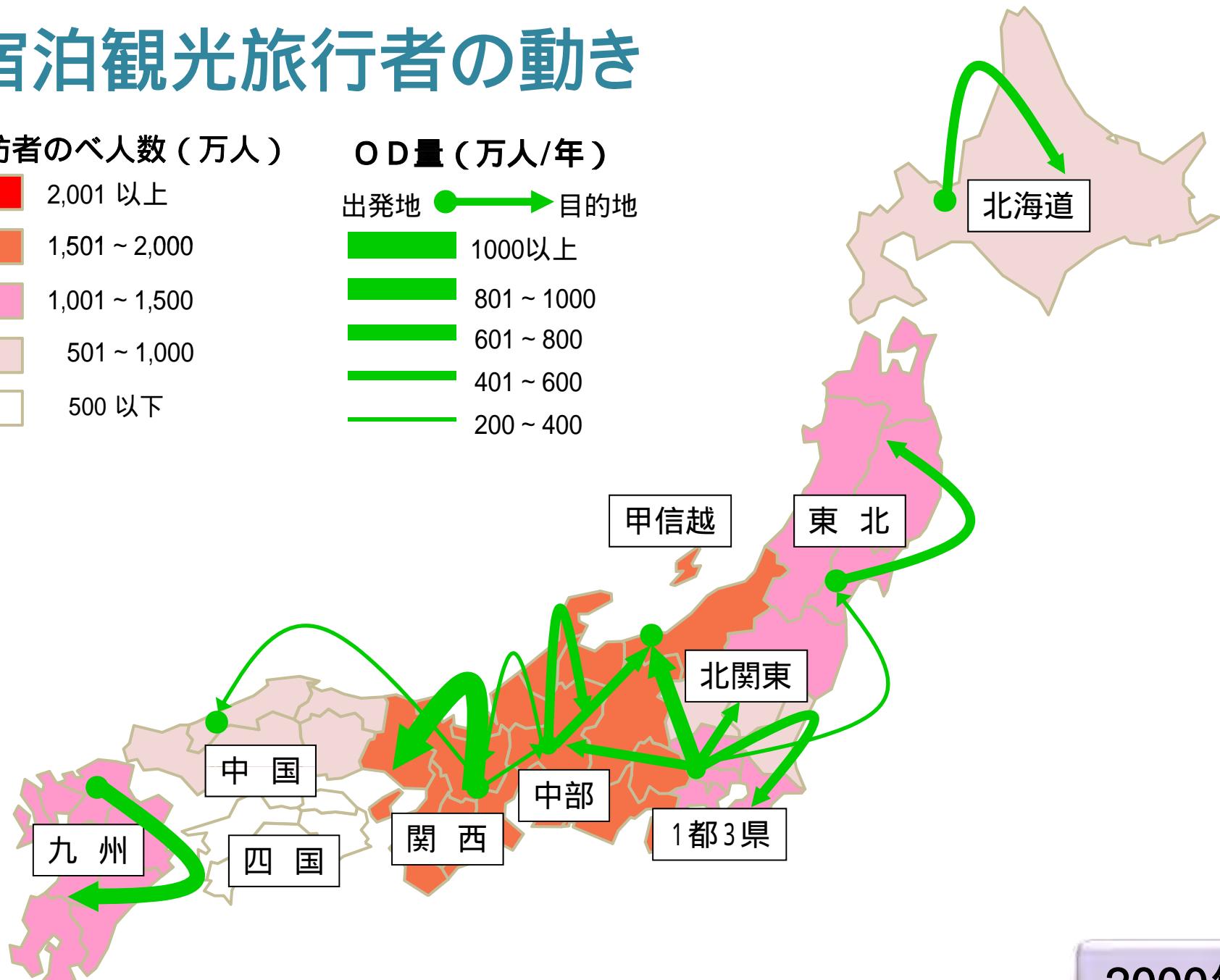


宿泊観光旅行者の動き

来訪者のべ人数（万人）



OD量（万人/年）



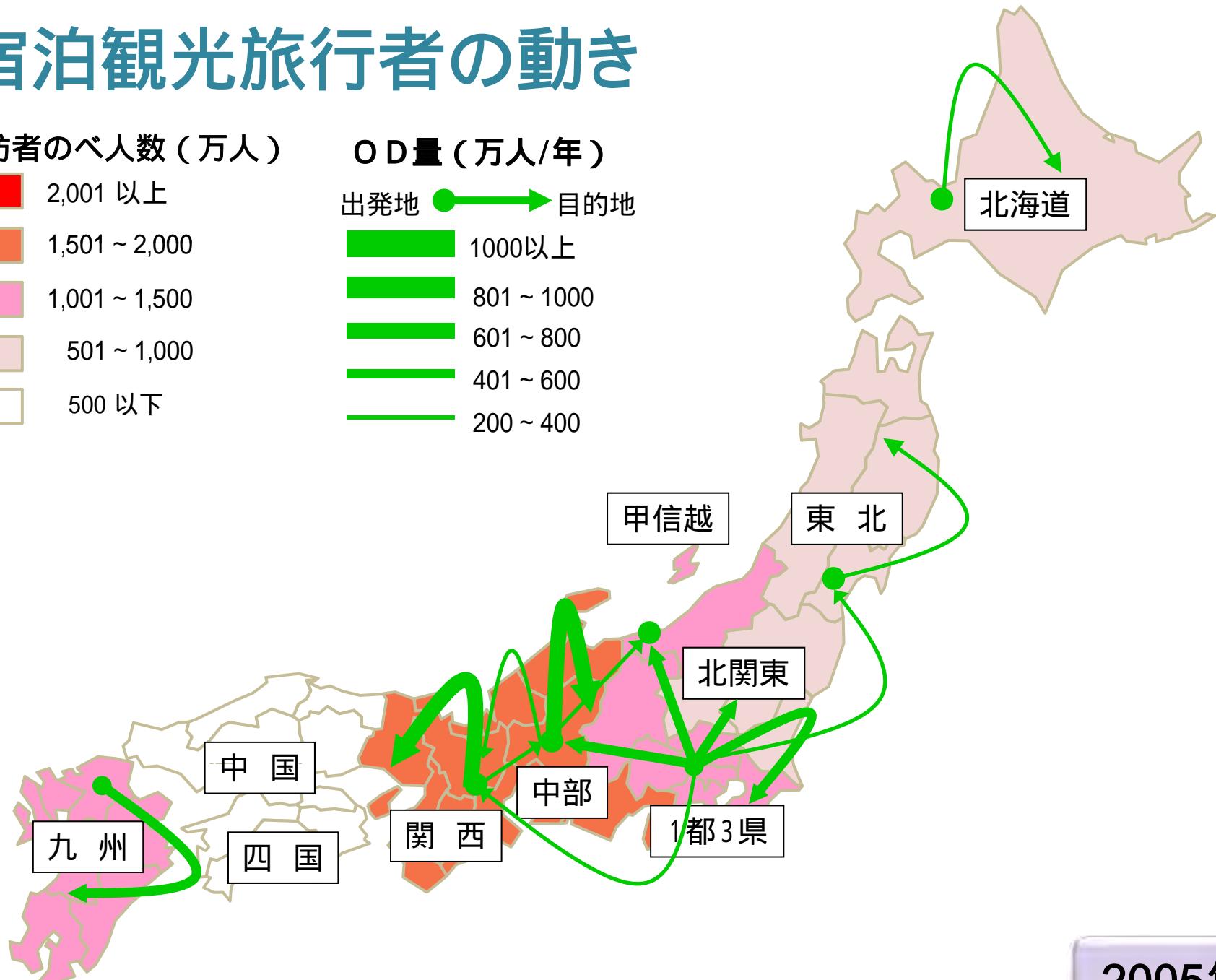
2000年

宿泊観光旅行者の動き

来訪者のべ人数（万人）



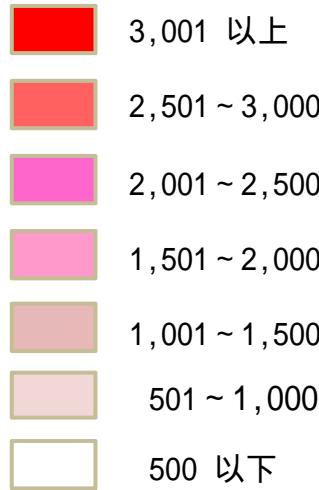
OD量（万人/年）



2005年

宿泊観光旅行者の動き

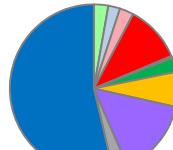
参加者のべ人数（万人）



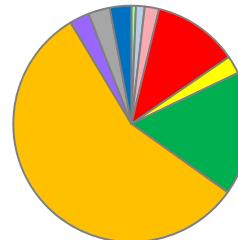
関 西

甲信越

九 州



中 国



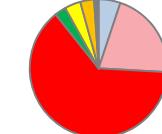
四 国



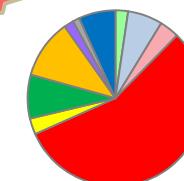
中 部



北関東



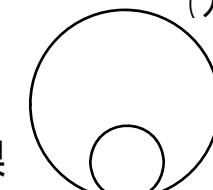
1都3県



来訪者のべ人数
(万人)

1,000

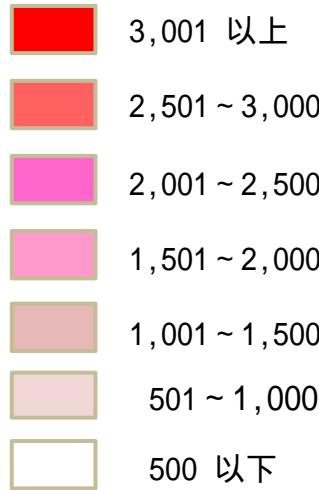
200



1985年

宿泊観光旅行者の動き

参加者のべ人数（万人）



関 西

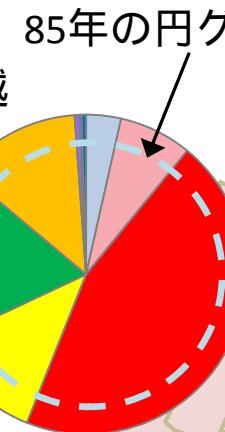
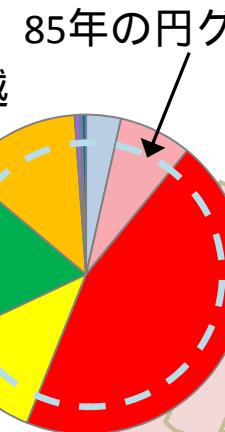
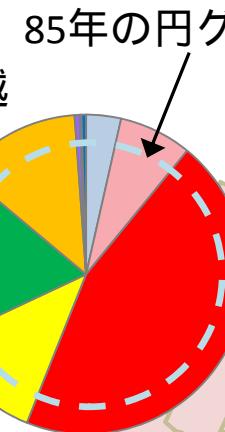
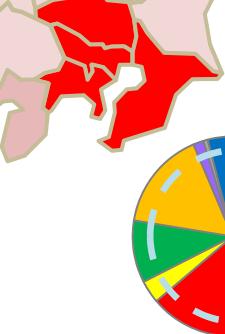
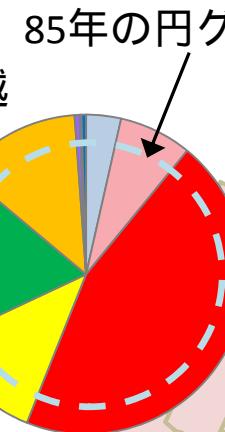
中 国

九 州

四 国

甲信越

中 部



来訪者のべ人数
(万人)

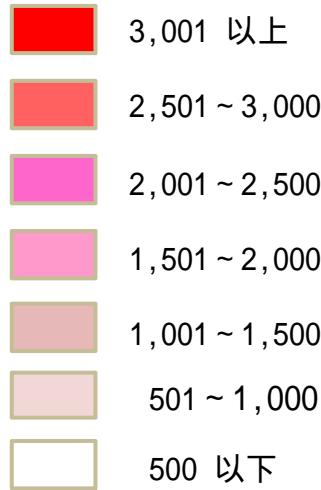
1,000

200

1990年

宿泊観光旅行者の動き

参加者のべ人数（万人）



関 西

中 国

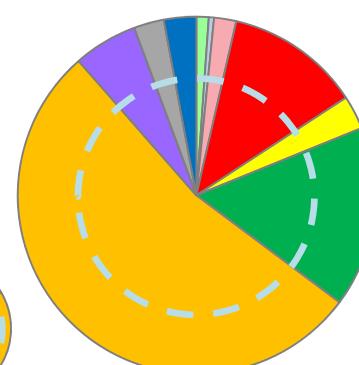
九 州



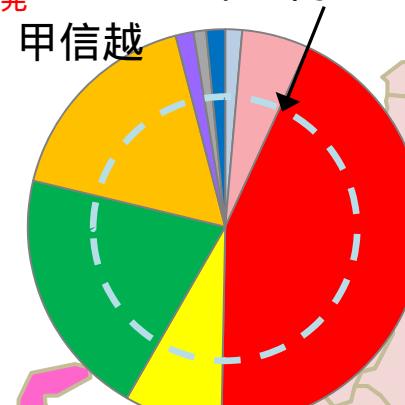
四 国



中 部



甲信越



北関東



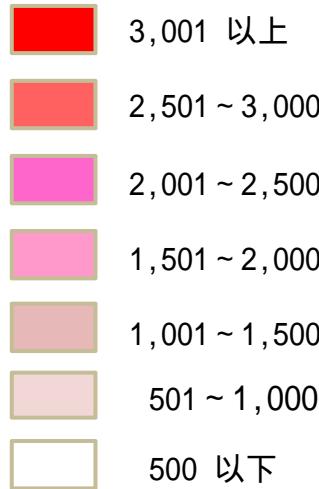
来訪者のべ人数
(万人)

1,000
200

1995年

宿泊観光旅行者の動き

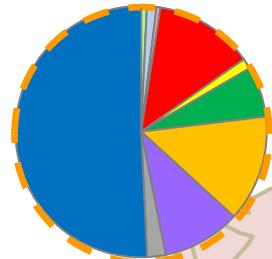
参加者のべ人数（万人）



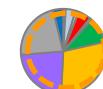
関 西

中 国

九 州



四 国



中 部

甲信越

95年の円グラフ

95年

東 北

来訪者のべ人数

(万人)

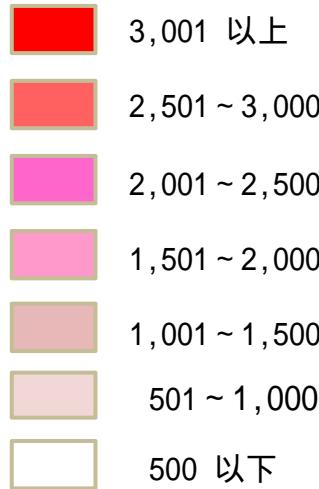
1,000

200

2000年

宿泊観光旅行者の動き

参加者のべ人数（万人）



関 西

中 国

九 州

四 国

中 部

95年の円グラフ

甲信越

東 北

北関東

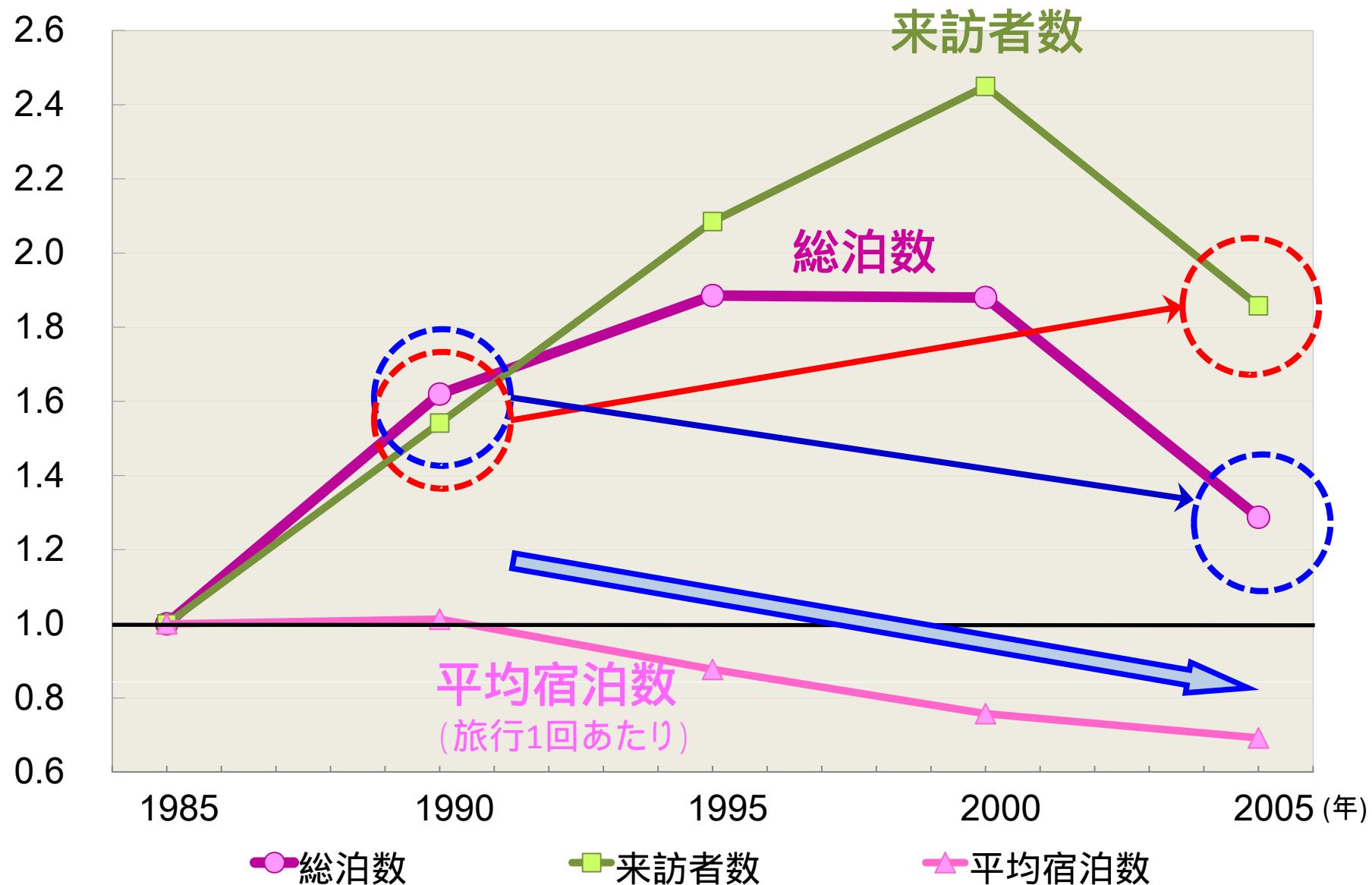
来訪者のべ人数
(万人)

1,000

200

2005年

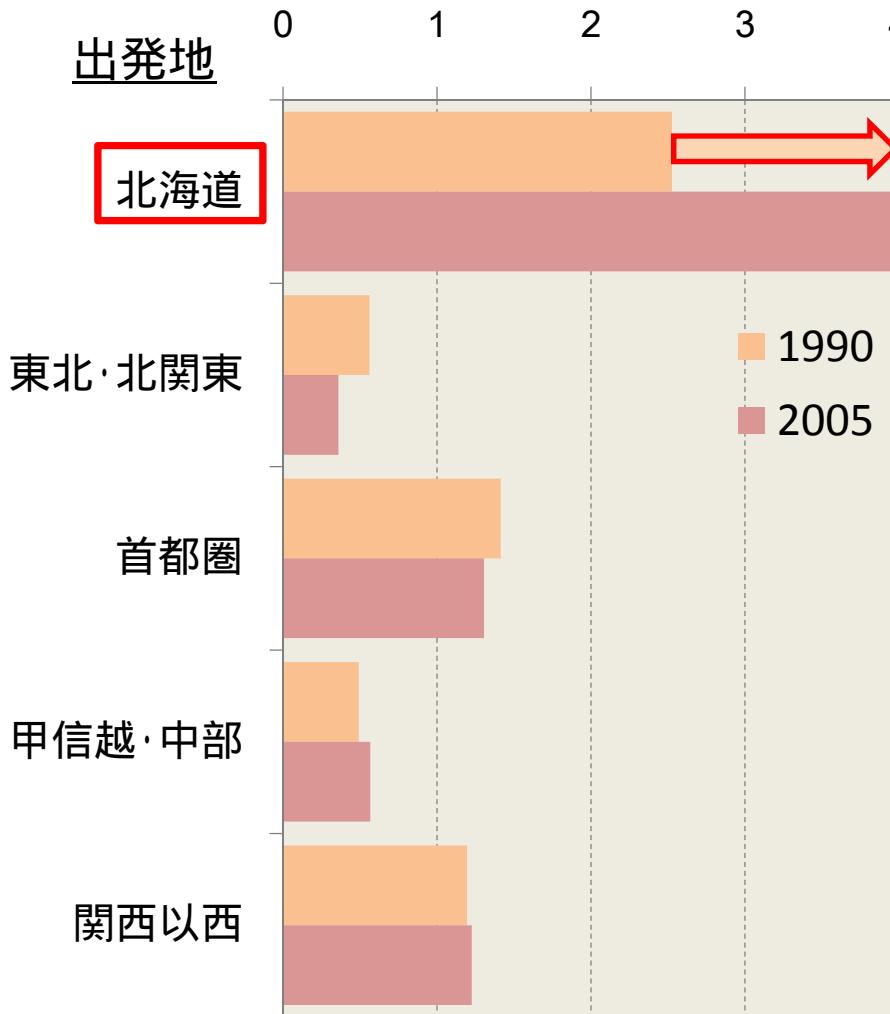
北海道来訪者の総泊数の推移(1985年を1.0)



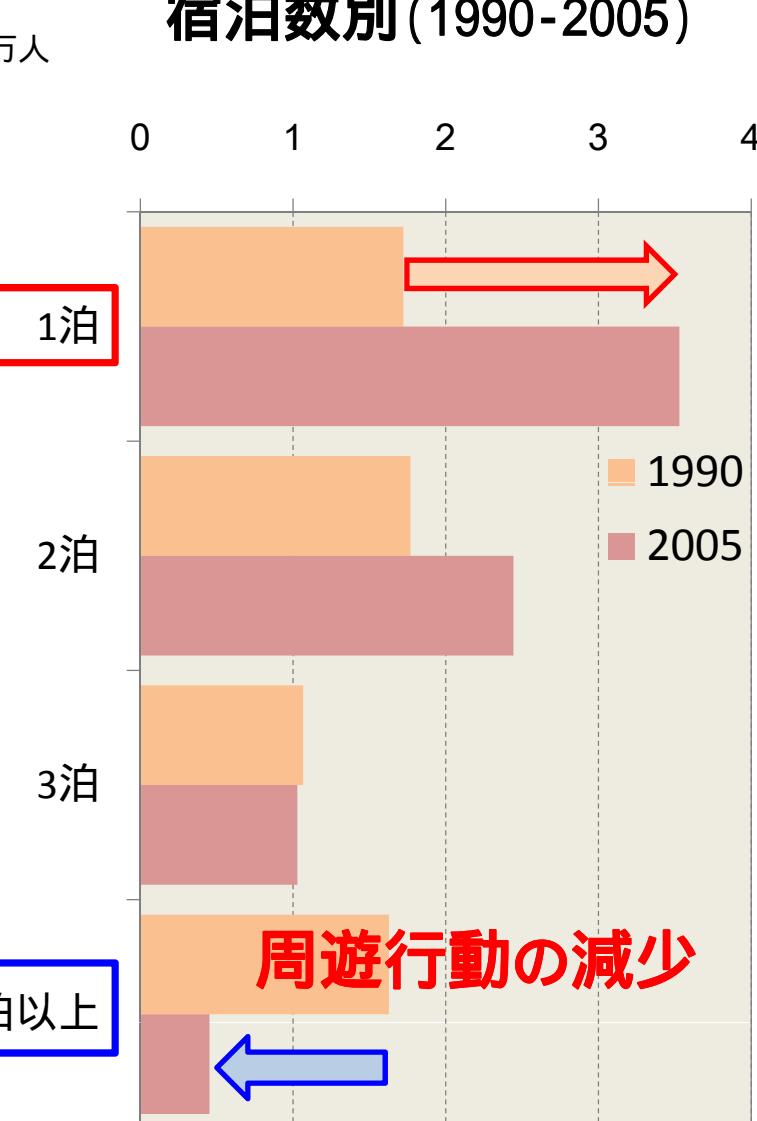
北海道来訪者のべ人数の変化



出発地別(1990-2005)



宿泊数別(1990-2005)



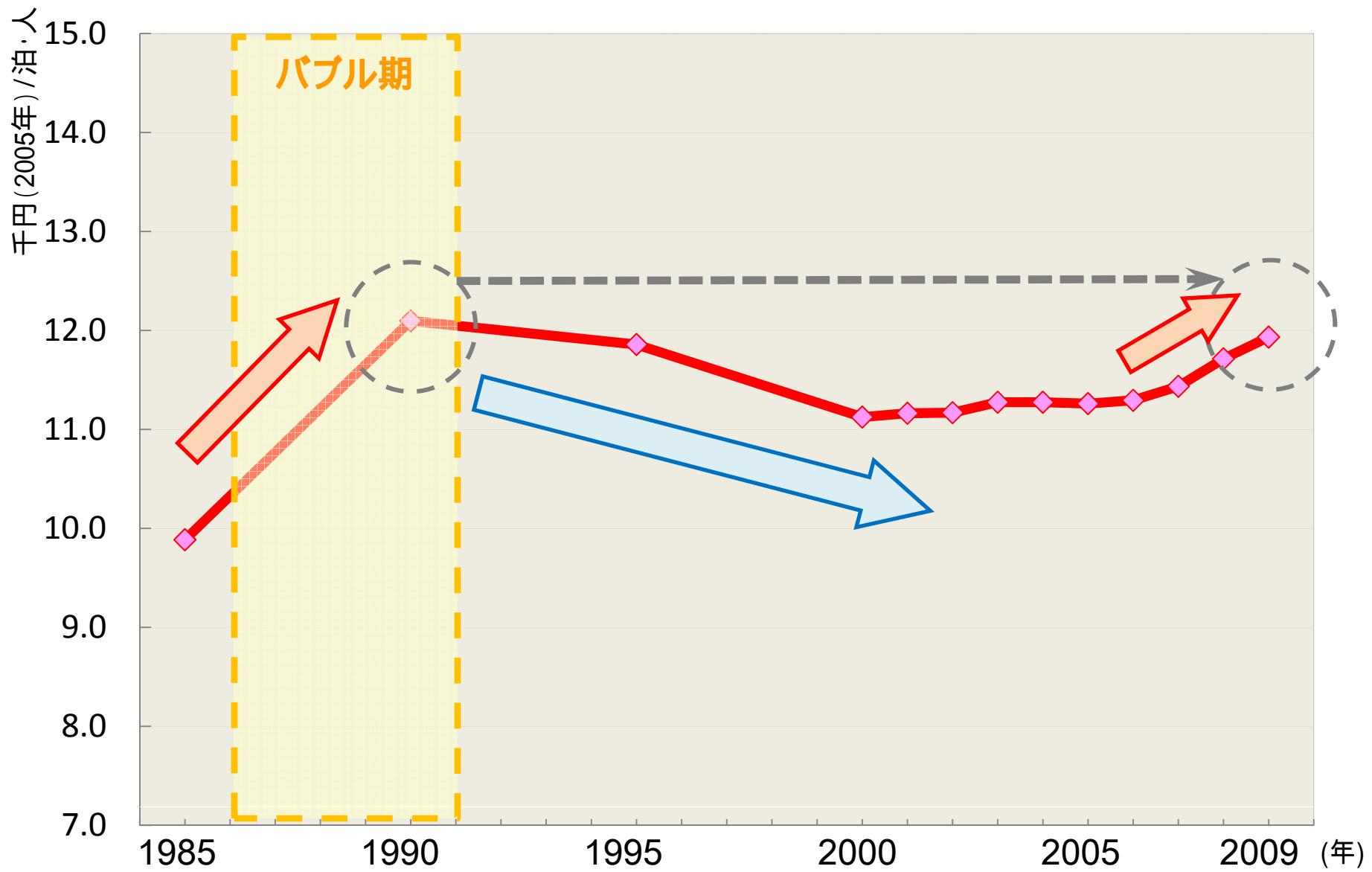
地域間の旅行者数の変動のまとめ

旅行者流動の変化の様子は全国一様ではなく
地域毎に大きな差がある

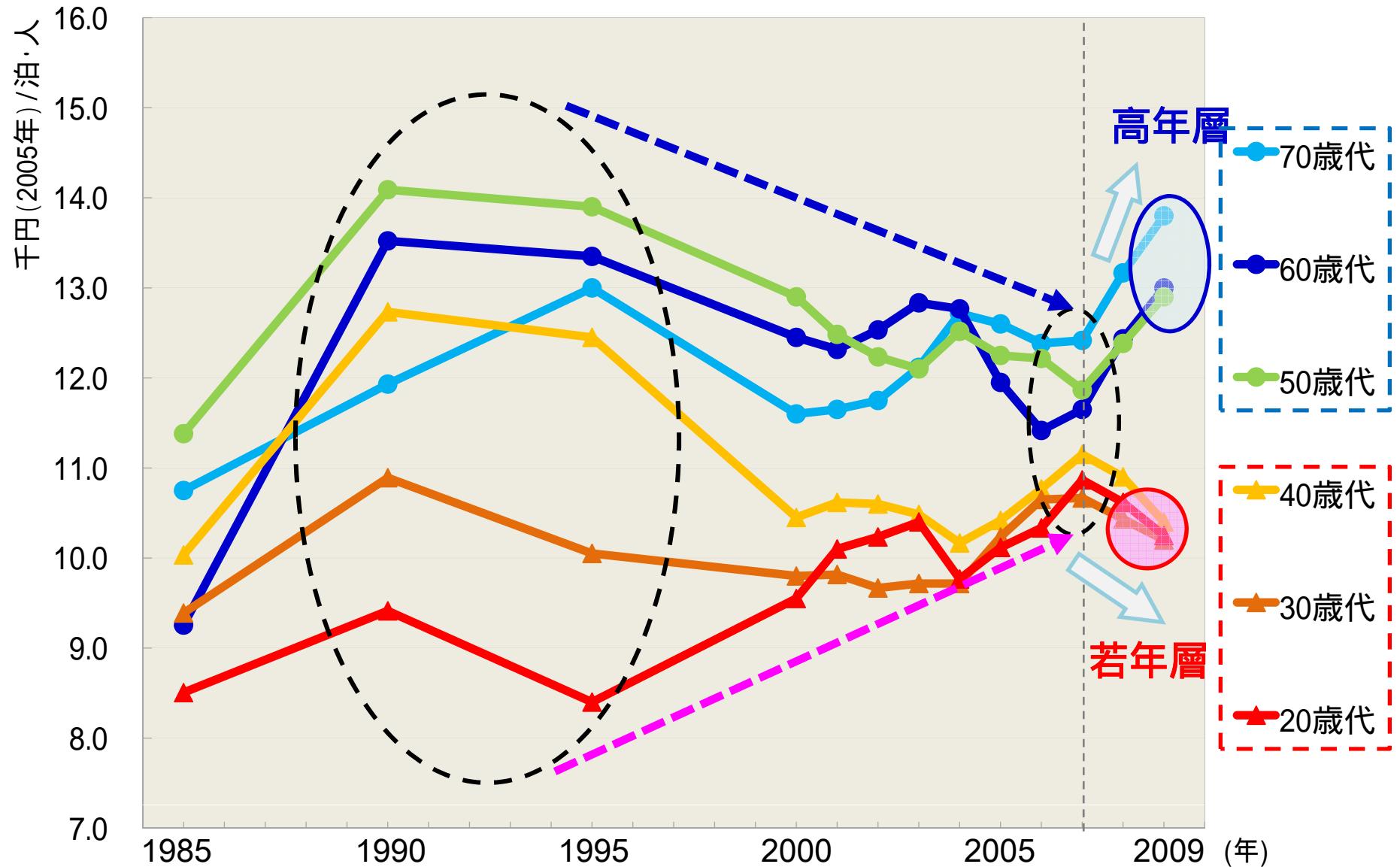
- ・ 甲信越の95年以降の激しい落ち込み
→ 20歳代のスキー旅行の減少
- ・ 来訪者数の落ち込みは少ないが、総泊数は伸び悩み(北海道、首都圏、四国、九州)
→ 同プロック内での1泊旅行の増加 & 長い旅行の減少
平均宿泊数の減少

1. 宿泊数に関する分析
2. 地域ブロック間の旅行者数の変動分析
3. 宿泊費に関する分析

宿泊費(千円(2005年)/泊・人)の推移



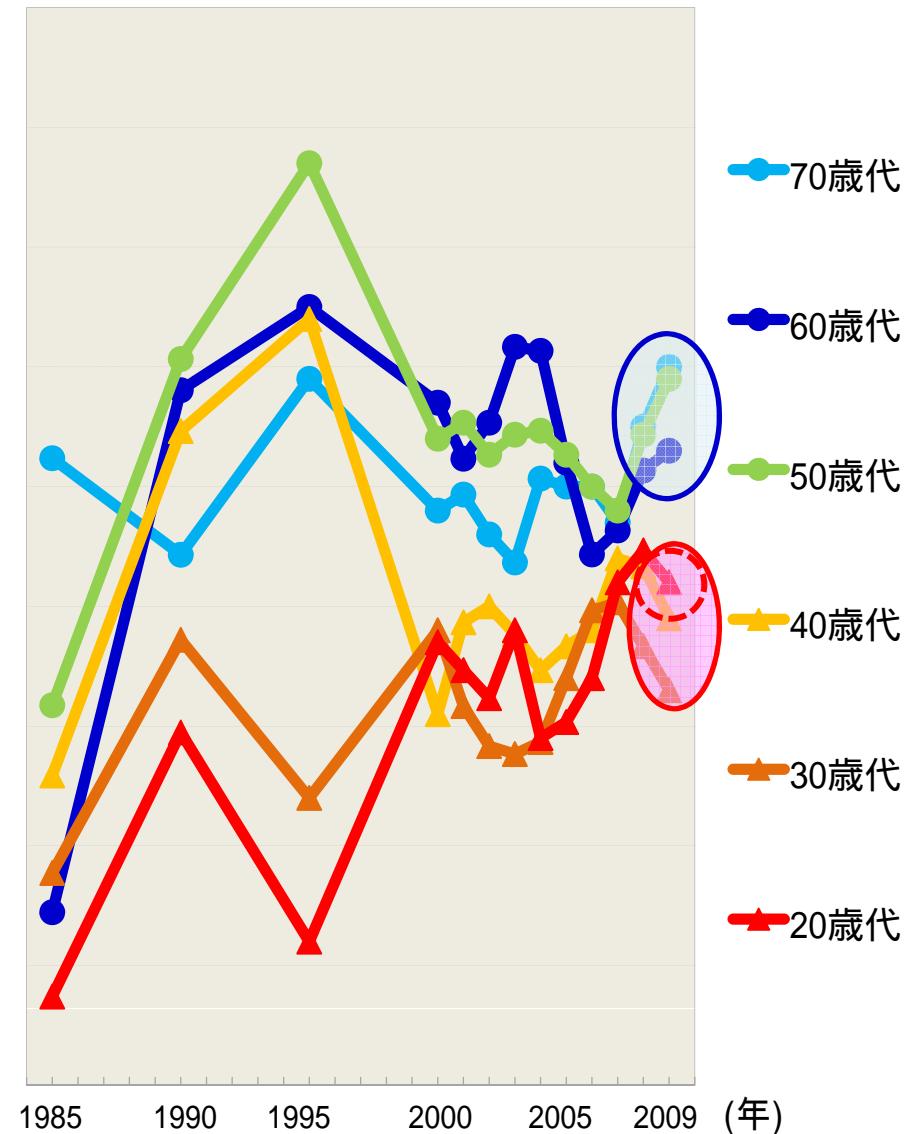
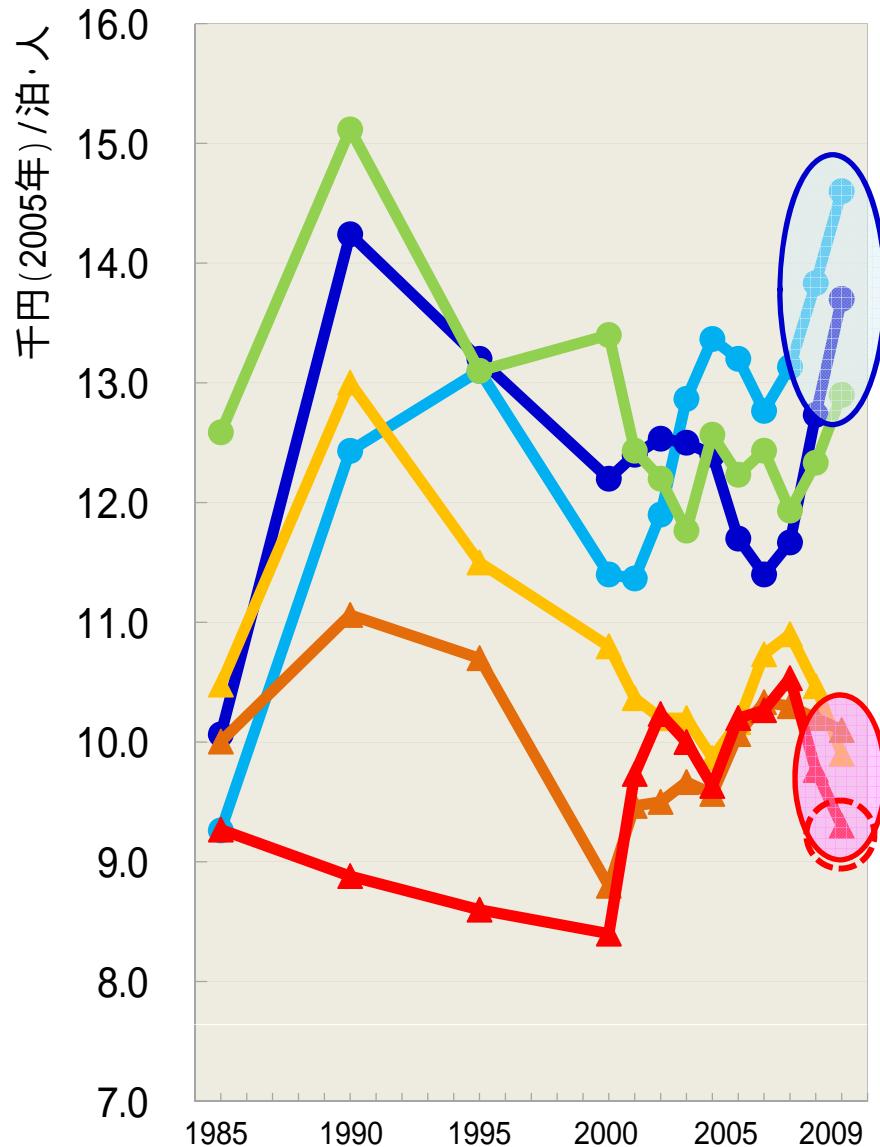
1泊あたり平均宿泊費の推移(年齢階層別)



1泊あたり平均宿泊費の推移(性・年齢階層別)

男 性

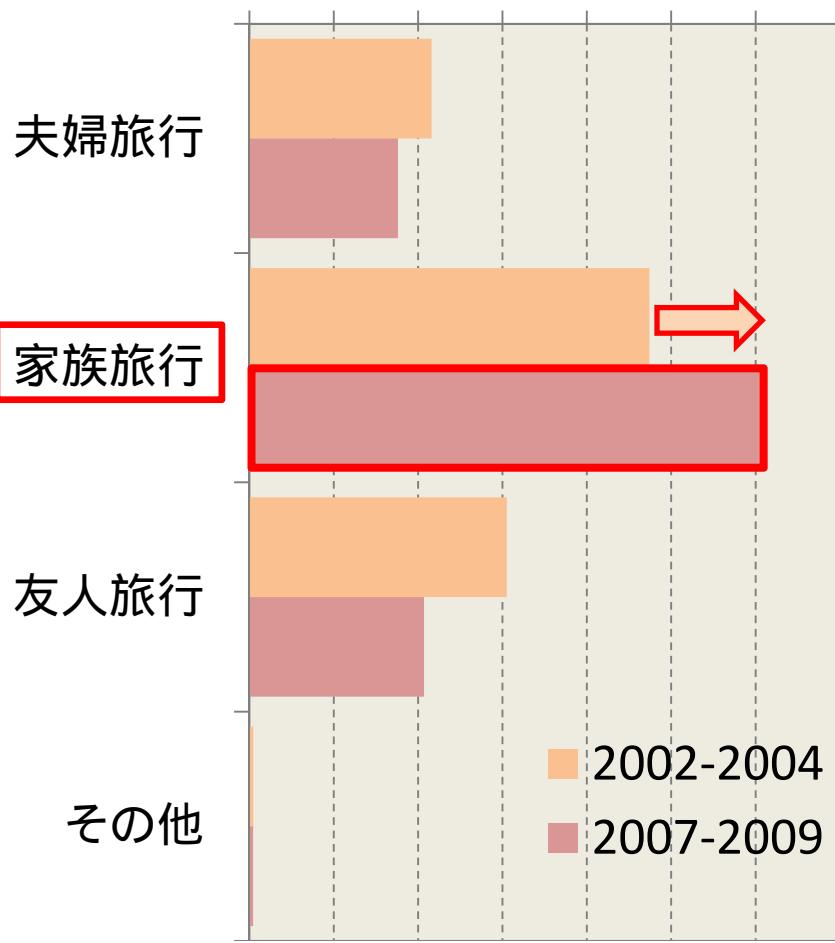
女 性



高額支出層（宿泊費20,000円以上/泊）の旅行形態の比較

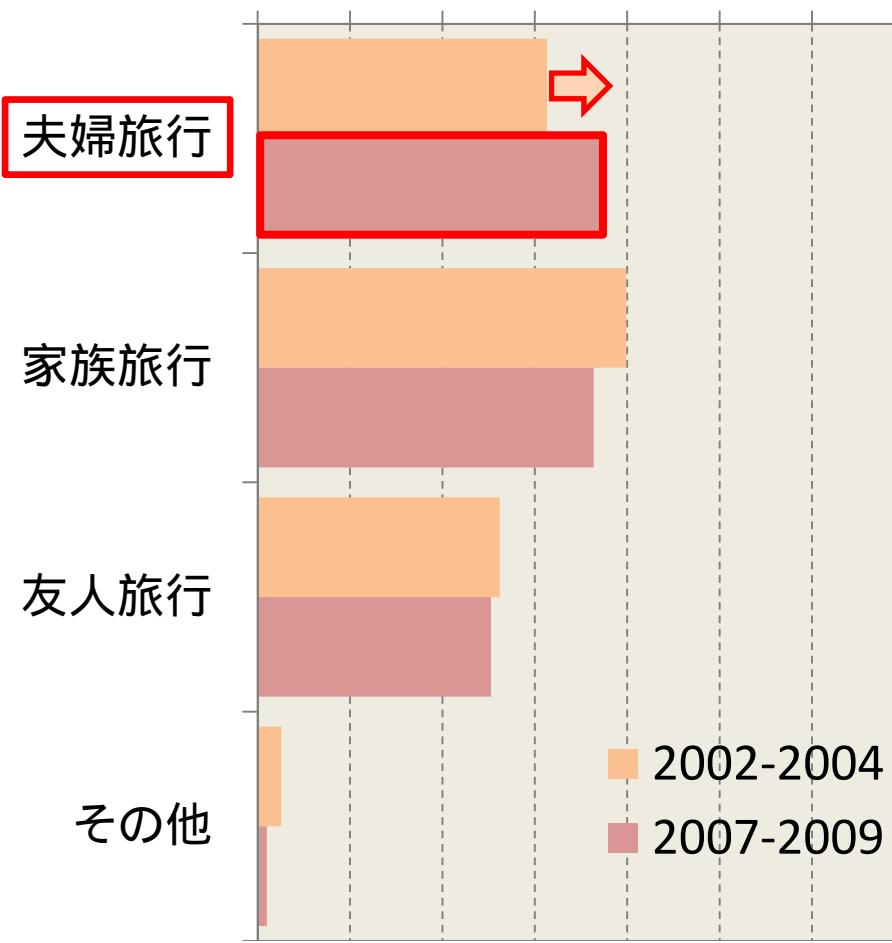
50歳未満の高額支出層

0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70%



50歳以上の高額支出層

0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70%



宿泊費用に関するまとめ

若年層と高齢層とで異なるトレンド

【若年層】

- ・ 近年は減少傾向 (**女性**の方が高額)
- ・ 高額旅行は**家族**と一緒に

【高齢層】

- ・ 近年は**高額化**が進行 (特に**男性**)
- ・ 高額旅行は**夫婦**で

まとめ

既存の観光統計データの利用
(簡単な集計 + 新たな視点 + 見える化)



国内宿泊観光行動の特性、過去のトレンド

- 旅行者属性(年齢、性別など)や
地域によって傾向が大きく異なる
- 年齢、世代、地域、旅行目的別の対応



効果的な観光施策検討のための情報

長期のトレンド + 短期のマーケティング + 個別の詳細な分析

今後の観光施策のターゲットおよび 若年層の観光離れへの対応

- 高齢者(団塊世代)は引き続きターゲット
- 高齢層は、旅行者数も多く、高額旅行も実施
- 団塊ジュニア世代の家族旅行
- 今の20歳代には、これまでの対応では効果が少ない(価値観の変化) 再教育が必要!?
- ひとり旅は、観光による経験等の意味では?だが、観光消費に着目すればターゲットの1つ
- 今の20歳代が旅行形態を変えるときがチャンス
- 20歳以下への施策が重要(家族旅行、孫との旅行)

大学生の時間の使い方の再考

- 観光旅行のインセンティブ
「今しかできない！」(周遊観光等)
- 就職活動開始時期の見直し
大学2年生からさせるべきか！?
- ダブルスクールのあり方
たいして勉強もできていない！?

「今だからできること、すべきことは何か？」

おわりに

若い人には、関心を地図上で広げてもらいたいです。

**若いときに、あそこに行って何を見たとか、何を感じた
というのが、ものすごく重要なんです。**

違う分野の本を2,3冊もって、**年間少なくとも30日は**
旅行をしてほしい。

私は大学生のとき、少ないときでも年間82泊は東京
を離れていきました。

そのときのことは、いま、**ものすごく大きな財産です。**

土木学会誌 行動する技術者 森地茂先生インタビュー記事より抜粋